

寬永錢研究牒

278
特 259
237



始



寛永銭研究牒

凡例

本書は拙著寛永銭記の資料として、各書の参考條項を鑄銭の年代に抄録し、特に藤譜は殆ど其全豹を分出し、芳譜は藤譜と同説の條を省き、又拙譜は藤芳二譜と合説の文を略する。



本書に引用した書名の略符を用いたのは、續化蝶藤原譜、古泉大全は大全新撰寛永泉譜、中川近禮氏私考は中川新撰古泉名鑑、東洋錢貨年表は年表、鑄貨圖録は鑄貨、錢幣館寛永銭略譜は略譜と記し、其他は略名せぬ。本書は泉友各位の要求に應じ、昭和三年八月發行したのを、今回再版に際し改訂増補した。

昭和五年二月六日

編者識

寛永銭研究牒

水戸座 第一期 並銭 萬曆自寛永二年至同四年

元和手



指譜 右寛永元寛永十三年前所鑄未詳其鑄地文曰寛永通寶(下皆倣之)
 永字皆從二从水上一種銅色黃濁製作精美下二種銀錢也未詳所以之者據水相
 似從七分半張銅錢重九分銀錢重一匁(銅身一匁重二匁本)
 中川 此一重極極尚文譜の追加する所なり今此を指して元和手と稱す
 製作元和和寛大字のものに似たるが故なり銀銅二種共に稀に存す然れども其
 體質正用品と見ゆるものなし。
 名鑑 銅字に正確の品は唯彫母を存し他は銀をなり通宝の二字を初め
 字文 意元和番多に彫似せり元和手と云ふ小貫四重を有し背に一ヨリ
 百造の番を彫りたるものあり。
 私考 水戸史料を參考に解して寛永二年に水戸で元初の記號を意味し鑄
 造した僅少の類と思はれる。現今の大家は銅字は銀の母字のみであること
 はるしが文政の頃には幾分の通用まであつた様に認めらる。

開元手



大企 藤譜 開元手永手二品、後相垣尚友述和之、香川雅堅本加開元手者、名鑑 對色及黒、製作薄粗、背更漫に近き不精の品にて、或文開元通宝に酷似せる寛永通宝唯二品の正品あるを知るのみ。私考 寛永二年に水戸の鑄造と認め、其存在渺なきとは云へ、二品ばかりではない。又一説に万治年間、長崎支に似て居ると云はる、大家もある。

太平手



藤譜 太平手、大空、稻字、湖縁、短空、長字、星文、無星、廣三、跳三、十三の十一種、二水永を一所に括し、右寛永永寛永十三年前所鑄々所未詳、文曰寛永通宝、永字皆從二、似水銅質黃色、有湖縁者有細縁者、径八分、重八分（以下別記）中川（上略）文政以後、常陸志料に依て、寛永二年水戸鑄造の事を知り、始て此類を以て水落鑄造の事となすに至れると蓋し、未だ詳かならず、一、二の異説あり（下略）太平手とは寛政以後の名稱にして、其以前は鎌宝と稱す。名鑑 銅色黒、精製作、渾重にして、或文通宝の二字は太平通宝と酷似し、永字二水をなす、初鑄、寛永の珍品なり、背郭起ちたる正品少なし。私考 寛永二年に水戸で鑄たと思へる。一説、万治の長崎支に美すると云ふ名家の論もある。

永樂手



抽譜 右寛永永寛永年間所鑄製作佳也、銅質有紫褐青褐二種、径八分、重九分、通宝二字及背體、明永永全同、俗云之永永手。中川 此考、芳川譜及藤譜に載せず、抽垣譜の追記に係る。古永堂云、藤氏の時、永永手なるもの未だ出でず、藤氏の後、尚友之を得たり云々。永永手の模定と其名は寛政以後に起る、太平手又之に準じての名なり（下略）

大寶



藤譜 太平手と共に説く。

大全 慶長寺
私考 前二考は寛永二年の水戸鑄造と思へる。



藤譜 廣三濶縁太平寺と共に説き文末に、又有背文穿下三字者。
大全 水戸史料寛永二年水戸人佐藤新助請鑄新鑄先世用水戸侯許之乃請
大府又請報可於是鑄寛永也此背文三蓋翌三年所鑄而面文同一無背文或初
鑄乎又一種濶縁背無文者亦同炉不容疑故列於此。

中川 (上略)又濶縁背三(中略)座爰無し。



藤譜 太平寺と共に説く。
私考 水戸第一期の多座は寛永四年座主佐藤新助の他界によって休止し
たこの短宝は同座に於ける末鑄であらう。

水戸座 第二期 鑄期自寛永十三年至同十四年七月



藤譜 太平寺と共に説き文末に、又有背文十三二字分在穿上下者。
大全 水戸史料寛永十二年佐藤新助子清兵衛及江戸賈人某又請鑄于水戸
煙草町今見背十三及星文然其如経通用者殆無或是試鑄而以濶縁者充之可乎
水戸紀年 寛永十二年乙亥今年寛永通宝を鑄る向井町片町煙草町ノ裏町

鑄座になる。
 桃蹊雜話 表屋の鑄の事、寛永十二年より同十七年まで鑄る。佐藤庄兵衛
 といふ商人なり、寛永を鑄しは之を始めとす。
 中川 十三の者共に座を無し。

長字




宿字




藤譜 太平手と共に説く。

二水永



同星



藤譜 太平手と共に説き文末に、一種有背穿上有凹点者。

背星



無星




藤譜 浅草と共に説く。
 私考 旧譜は浅草に列してあるが、星文は二水の星文に就いて鑄た様で
 ある、当期中二水手のみを鑄たすとすれば、少額ではあるまいか、されば
 十四年七月官局に移管する迄はこの星を造つたものと思へる。
 永字の事 永の字は寛永の中頃迄は一般に永の書體が多い、社寺の棟札及
 金石文等は殆どそれである、又寛永三年に出版した東鑑は全編悉く永字であ
 る。


江戸座

鑄期自寛永十三年六月至同十七年八月

志津摩 大字



同上 斜玉寶



藤譜 古寛永を一所に拓し、右寛永も寛永十三年至明曆中江戸浅草所
 鑄文曰寛永通寶、下皆倣之、按此、銅質精煉有黄白褐三品、摸状及字文結體有數
 十種不究、盡徑八分五厘、重一匁、小者七分五厘、強一種有濶縁者、又一種有背穿上
 有凹点者。
 芳譜 寛永十三年五月至明曆年中江戸浅草橋場所鑄。按此、銅質精煉有
 黄有二品、摸状字文結體有小異、同今所存九、二十餘種、径八分五厘、重一匁、俗稱御
 藏也。

箱譜 正郭 藤譜 右寛永背文...

中川 藤譜には御藏を乃ち志頭...

譜に至り共に此類のみを止め...

本譜を編するときは未だ志頭...

の類を以て御藏を定め...

の如き順序を以て今日に傳る...

の類を見ても安永年間宇野...

長嘯子教直志頭三筆あること...

人なれば其説皆統化蝶美苑に...

に藤譜と才川譜との區別を見る...

味にして信ずべからず...

めたり其文左の如し...

算精煉如浅草所鑄間有楊銅者...

精煉如浅草所鑄間有紅楊相雜者...

泉志 佐々木志津磐乃俗松弥七...

め書法を加茂教直に受け後ち研究...



のこれなり元禄八年正月十九日...

正郭

縮字

正郭の内に背に番号を記したのがある...

藤譜 右寛永背文...

十一十二十三十四十五十六...

江戶浅草工戯鑄者銅色紫褐製作精巧...

泉志 前記藤譜を書き文末に...

体を異にしあれば全く戯鑄のまなるべし...

にも意味ありげに見えければ或は嘉定の祝鑄...

正郭壹元背



進点永



小永



肥永



降宝



狹穿



同大字



宝連輪



正字



小異
永寬



寬永彙錄

寬永十三年五月鑄于江戶、蓋御藏也。

和漢泉貨 寛永十三年丙子五月、御座免許。
 泉志 御意まといへる名は、幕府の御蔵に納め置き、て時々、松下られたるに
 より起る
 貨幣 寛永十三年丙子六月、銀座役人、秋田宗古に命ぜられ、芝繩手及び
 江州坂本に於て、新たに、座を立、始て銅貨を鑄る、是を寛永通宝といふ。或書
 曰、六月朔日より、通用被仰出、石谷十藏鑑之。
 貨幣 二一 寛永十三年鑄造の江戸の、座の所在地は、旧末は、芝及び浅草の
 二ヶ所とせしは、誤りにして、芝座のみなり。

坂本座









鑄期 自寛永十三年六月至同十七年八月

潤縁		
細縁		
不挑永		

藤譜 挑永一種を貼し、石寛永寛永十三年近江国坂本所鑄銅色黄濁徑

八分、重一匁。
 藤譜 (略) 徑八分、重一匁、有二種。
 稻譜 (略) 有二種、又一種有潤縁而永字跡者至多。
 地元村役場回答、今、座の跡と口碑に残る場所は、下坂本村通稱三田ノ河
 原と稱する地云々。昭和二、三、二八。
 芳譜 傳曰、寛永十三年近江国坂本所鑄、尊其樣所私鑄、其俗名曰坂本質、今
 有銅質、黒濁製作、兼悪者、疑是、矣、徑七分、重不過四分。
 泉志 この書の書体にして、寛永の頃、鑄たりと云、小粗悪の私鑄、あり、よく
 銅質製作に注目して、寛永年間のもの、と混同すること、なから。

水戸座 第三期 鑄期 自寛永十四年八月至同十七年八月

長永		
外跳寛		
壽柱永		
小通		

三貨圖彙 寛永十三年十二月許可翌十四年より鑄造。

高田座 鑄期自寛永十四年八月至同十七年八月

カ 水



藤譜 浅草寺と共に説く。

考譜 浅草寺と共に説く。候補地として識者間に高唱する。

貨幣 八四 挑永美は高田を最も恰好なる候補地として識者間に高唱する。同 八五 笹寺永は高田座との推定説最も高調する。略譜 笹寺永降宝縮通同上小様細字は高田座。

萩 座

鑄期自寛永十四年八月至同十七年八月

良 恕



碗 文



藤譜 浅草寺と共に説く。

考譜 浅草寺と共に説く。泉志 良如上人は山光西本願寺第六世の法主なり、慶長十七年十二月七日を以て生れ、寛永三年四月十九日得度して大僧都となり、同十五年十一月大僧止に任じ、寛文二年九月七日寂す。

略譜 良恕、良恕寺、碗文、同上、潤縁は長門萩座。

岡山座 鑄期自寛永十四年八月至同十七年八月

長 嘯 子



藤譜 浅草寺と共に説く。

考譜 浅草寺と共に説く。泉志 木下勝俊は長嘯子と号す、従四位に叙し、少将若狭守に任ぜられ、若川小湊の城主たり、晩年東山に隠居して又天哉翁と号す、慶安元年六月十五日卒す。

進 永



長字



歪永



藤譜 浅草寺と共に説く。

芳譜 浅草寺と共に出る。遊仙堂 浅草寺の旭町で發掘した長字(泉志本細)の拓本を大正九年七月送

前せられた。鳥城古泉會七 從來報告せられたる岡山鑄造は寛永十四年十二月より同

十五年迄にして鑄造の場所は多屋敷と稱せられ御津郡二日市村現岡山市旭

町にして大部分は岡山刑務所の敷地となり其一小部分は鑄造の抽荷社と共

に刑務所西北隅西川河畔に残存(中略)今聞知したる多屋敷(おねふま)はトモ

河は上記多屋敷と旭川を隔て、上流約十町の所にして岡山市花畑現今鐘

紡績社宅となる地なり(下略)略譜 長崎子、長崎子、長崎子、同上中字、跪寛、伸寛は備前岡山座。

池田侯略記 参府。鑄造於岡山。閏三月五日岡山を發駕有て江戸に著賜

小、今年岡山にて新に鑄ることを命ぜられ、京兆尹板倉周防守のもとへ湯

淺右馬允御使として、京都の鑄造師備前に参りて鑄けること云ふ。(中略)八月廿五年

二月一日江戸より台命有て新製を鑄るべしと仰出され、天野屋宗入と云者備

前に下る、去年も鑄させられ、今年も鑄させられ、今年も鑄させられ、今年も鑄させられ

と(以下略)竹田座 鑄期自寛永十四年八月至同十七年八月

異永



降永



芳譜 寛永十三年南都所鑄白銅精煉模狀三種、徑八分強、重一匁、間有黃銅者。

中川 古泉堂の旧記に云ふ、予嘗て南都に遊び此事を古老に質す、余は云ふ

寛永以來鑄造有りしこと無しと。他の古記録に依るに更に南都鑄造の説あり

ら、此を未だ確かならず。泉志 稻考亭が後の追加稿本には「俗曰敦直書とあり。藤木甲斐守敦直は

加茂の祠官にして慶安二年正月四日卒す、歳六十八。貞幣 四四 我座竹田古町開鑄、寛永十三年廢止、同十六年。

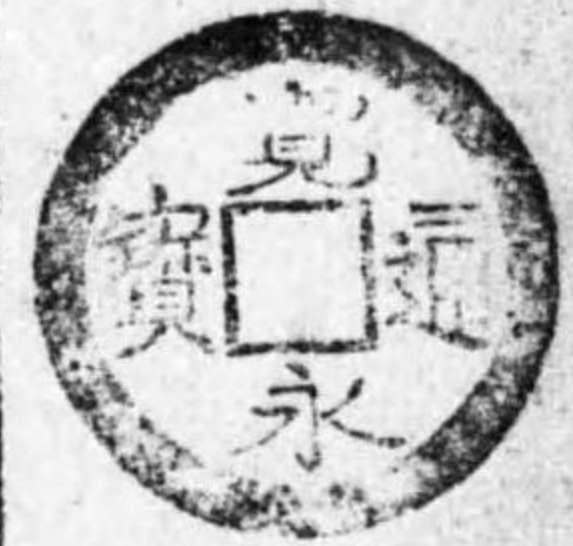
同 幣 五八 同譜に南都所鑄とあるは竹田座の鑄と擬せらる。略譜 異永、奇永、麗書、効文は豊後竹田座。

駿府座

第一期

鑄期自寛永十六年至同十七年八月

小頭通



大字



細縁



魚尾宝



藤譜 (小頭通) 元禄四年至一説元禄十年江戸亀戸所鑄銅質黄色徑八分重一匁。

(魚尾宝) 浅草支流也。芳譜 (小頭通) 上略徑八分重一匁九二種。(魚尾宝) 浅草支流也。

続化蝶 には別に十年亀戸鑄造の一匁を増し、本文の匁は四年京都の鑄造とす。

集古文奇 或曰古刹を過ぎ寛永匁數百枚を見る、記云貞享以来相傳る所存り然ども其中此匁數枚有り、則ち元禄の物に非ること昭然たり云々。

泉志 明曆浅草の芝座は、明曆元年八月幕府の命によりて再興(新設)せられたるも翌二年十月に至り町人の類によりて民鑄に改められたり。

徳川十五代史 万治元年五月十三日、五百石以上の輩に新鑄の匁買かべき旨を命ず。

貨幣二一 寛永十三年鑄造の江戸の芝座は芝のみにして、浅草は明曆元年に始めて設けられたり。

同 二四及九一 この座の鑄型に番差あるを發見す。

同 一〇七 明曆の芝座は鳥越に置かれたるものにして、其位置は今の鳥越町十番地より西鳥越町一番地に跨り鳥越川に沿へる所なり。

遊仙堂 藤譜の元禄四年六々の匁を以て此匁に宛つるを穩當と認めたり、即ち泉譜元禄亀戸匁なり。

私考 初設の官營の時ほ五十匁と鑄、民鑄となり長谷川壽定外一人の受買にて七万九千二百匁と鑄、明曆三年正月焼失し、同年三月再建して三十万匁と鑄造した。

駿府座 第二期 鑄期自明曆二年至同三年七月

内趾寛

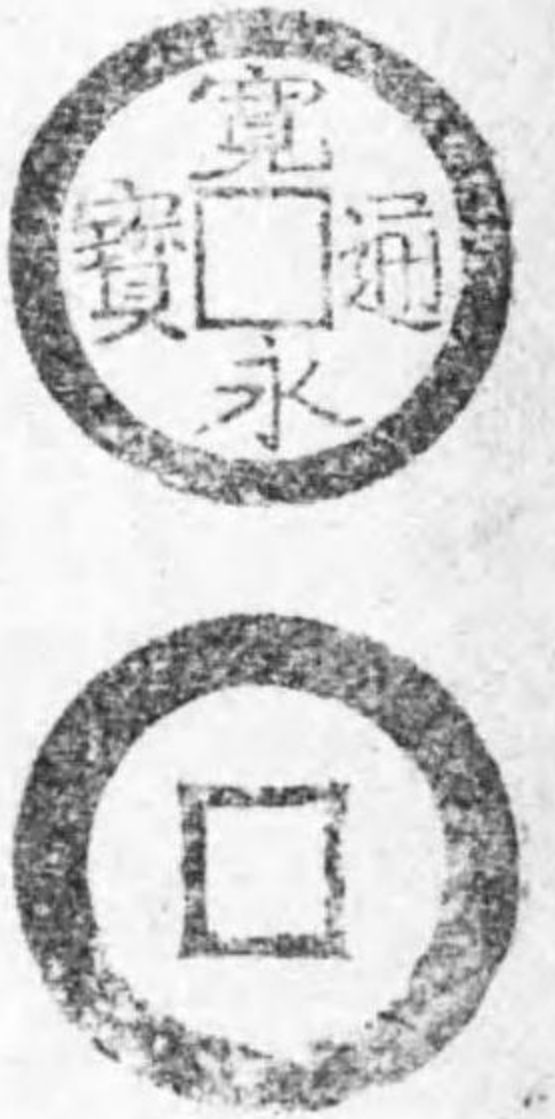


降宝



駿河府志 多局趾在沓谷村、明曆二年鑄寛永通宝二百万緡於此、一歳而止、其似大仙支而稍輕。名鑑 黄褐大様なり、金銀の寛永鑄造は此座のもの多く存す。貨幣六四 五百万緡を鑄る世に之を駿河と稱す。駿府在沓代、記云御城

背反郭



芳譜

寛永十三年駿河国足洗村所鑄此字文結體及径重不見之。

中川

寛永十六年并之庵村にて鑄る。藤譜之を載せず他の二譜も之を

見ずと記

此一章亦芳川譜の追記する所なり藤譜之を載せしものと見ゆ。

古余堂

旧譜之を載せず今大村氏の定る所に補出すと其表上圖の如し。

貨幣九

寛永十六年駿河に於ても又其座を開きしもの如く云々。

私考

寛永十六年に幕府が増設した其座である。井ノ庵は皆ノ谷のこと

京都座

鑄期自承應二年八月至万治二年

廣寛



狭寛



藤譜

寛永十三年江戸芝所鑄銅質紫褐色径八分強重九分有二様按此多有銅

質帶白色者至多。又番号を記したのに對して、背文表面文寛永通宝篆文一至十六始淺草所鑄江戸芝芝工戲鑄。

番多背



貨幣六。

旧譜芝座とせしは京都座のことなり。鑄重宝記京建仁寺並

栗田口にても鑄あり受買人郡司兵右衛門其始末いまだ詳ならず。承應二

年至万治二年京都所鑄也。私考寛永十六年に芝座淺草座京都座のこの旧説の誤解を詳細に説明してあることなる故こゝには省略した。

淺草座

鑄期自明曆二年八月至万治二年

小頭通		大字	
細縁		魚尾宝	

藤譜 (小頭通) 元禄四年至一説は元禄十年江戸亀戸所鑄銅質黄色徑八分重一匁。魚尾宝 浅草支流也。

芳譜 (小頭通) 上略徑八分重一匁九二種。魚尾宝 浅草支流也。続化蝶 には別に十年亀戸鑄造の一匁を増し、本文の匁は四年京都の鑄造とす。

集古文奇 或曰古利を過ぎ寛永匁數百枚を見る、記云貞享以來相傳る所存り、然ども其中此匁數枚有り、則ち元禄の物に非ること昭然たり云々。

泉志 明曆浅草の匁座は、明曆元年八月幕府の命によりて再興(新設)せられたるも翌二年十月に至り町人の願によりて民鑄に改められたり。

徳川十五代史 万治元年五月十三日、五百石以上の輩に新鑄の匁買ふべき旨を命ず。

貨幣二一 寛永十三年鑄造の江戸の匁座は芝のみにして、浅草は明曆元年に始めて設けられたり。

同 二四及九一 この座の鑄型に番匁あるを發見す。

同 一〇七 明曆の匁座は鳥越に置かれたるものにして、其位置は今の鳥越町十番地より西鳥越町一番地に跨り鳥越川に沿へる所なり。

即ち泉譜元禄亀戸匁なり。私考 初設の官宮の時、五十万貫と鑄、民鑄となり、長谷川壽定外一人の受買にて七万九千二百貫と鑄、明曆三年正月焼失し、同年三月再建して三十万貫と鑄造した。

駿府座 第二期 鑄期自明曆二年至同三年七月

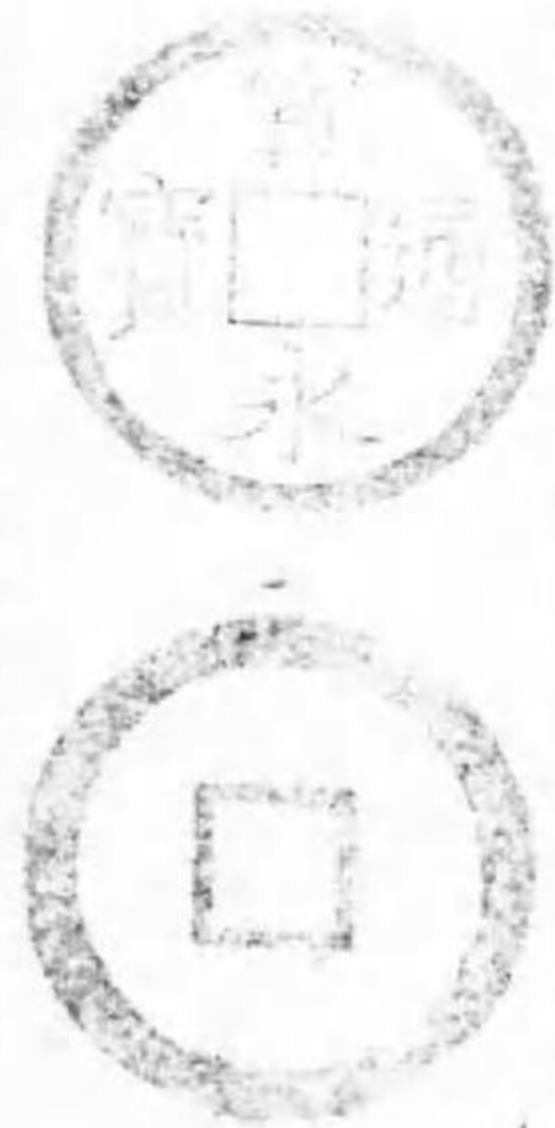
内趾寛		降宝	
-----	--	----	--

駿河府志 多局趾在沓谷村、明曆二年鑄寛永通宝二百萬緡於此、一歳而止、其似大仙支而稍輕。名鑑 黃褐大様なり、金銀の寛永鑄造は此座のもの多く存す。貨幣六四 五百萬緡を鑄る世に之を駿河と稱す。駿府在沓代、記云御城

代松平丹後守某組是を勤む。

龜戸座 第一期 鑄期自寛文元年六月至同二年

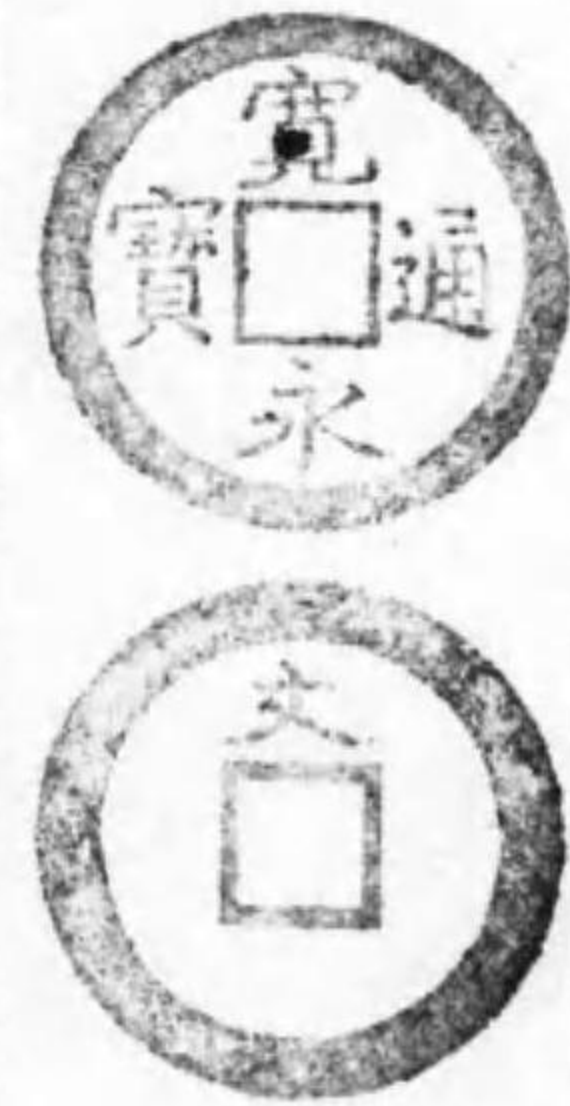
島屋表



同直宝



同文表



藤譜 寛文中江戸龜戸所鑄字文、左衛門大尉拍高庸書、黃銅精煉、徑八分強、重
 如一種有背文、文字在穿上者。
 芳譜 正略又有無背文、俗誤爲耳白表、又有白銅者至尠矣。
 續譜 正略字文正五位下行左衛門尉拍高庸所書、字文結體有肥瘦、黃銅精煉
 大者徑九分弱、重一匁三分、背文在穿上、又有無背文者、俗誤爲耳白表、一云島屋表。
 所鑄と云りて無背表のみとす。宗明曰く兩説不分明なり然れども文字ある者
 ものあれば藤氏の説可なるべしと。

年長補正 鑄時寛文元年。

名鑑 黃銅大煉製精煉他の文より文字深くして肥たり、小異の特徴は通
 字の頭工の如く他の品と異る差あり、母型殊に少し、無背文の品耳白表と云ふ
 白銅にして薄肉のもの少し、筆者は左衛門尉拍高庸と云。

龜戸座 第二期 鑄期自寛文三年五月至天和三年

肥字



潤縁



細縁



細字



瘦字









取濟



藤譜 文字考。寛文三年至天和三年江戸所鑄此等平安方廣寺銅仙
 鑄之源信綱建議也此等文字有肥瘦二様而肥者有瀾環細縁二種並背文文字在
 穿上銅質精煉有黃白二品而白色者至夥又有背左右倒置取濟二字者此天和三
 年治鑄畢日所鑄云徑八分重一匁。
 芳譜 高橋書文字考所載寛文三年至天和三年肥者五様瘦者一様而肥者有瀾
 縁細縁二種(肥)又大様有二種徑八分五厘重一匁餘字文結構亦有肥瘦。
 猶譜 (上略)肥者六種瘦者一種(俗)俗云大仏也。
 貨幣通考 面に寛の字と析る用ぬ文の一字を附して寛文中の製なること
 を表す。
 鑄考 吳服加後後藤達殿助茶屋四良次郎龜屋源太郎三島吉之進上柳平
 左衛門茶屋長曾。
 泉志 辻高橋字は春達書法を弘文院学士林道濟に受け楷書を能くす(俗)後
 ち傳府に召されて御日記役となり正五位下行左衛門大尉に叙せらる。
 寛文遺跡考 世に念仏まじと稱する繪巻の中むも古しと思はるゝものは外
 輪に寛文四年八月の紀年あり此巻の製作銅質文を異らす恐くは其坐座に
 於て作りしものならん蓋し坐座にて念仏まじを鑄るの起りは大仏鑄録の供養
 に基くなるやし。
 中川 寛文二年地震の爲に殿堂佛像共毀壞す。寛文三年より鑄初めたる
 こと確かなるべし。

江戸座 第三期 鑄期自元祿十年三月至宝永元年

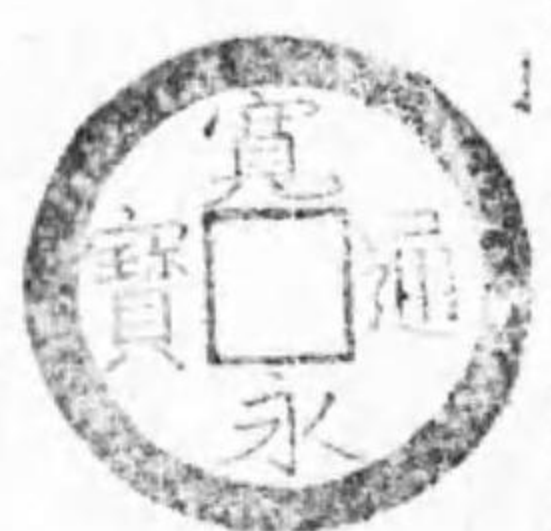





<p>幻足寛</p> 	<p>瀾水</p> 	<p>小字</p> 
<p>俯永</p> 	<p>仰永</p> 	<p>瀾縁</p> 

藤譜 此等有四種俗曰四宝也。
 泉志 萩原圭の一種なるべし。さるも何故にかく呼びけりものか蓋し萩原
 圭が正徳元年に三宝銀を改鑄して四宝銀となせし其の當時にこれらの事
 をも鑄造せしめたるに由るものならんか未だ詳かならず。
 江戸座遺跡考 本島は江戸遺跡より編者の発見せし所に於て古來の古家
 座を不知品として永く其鑄所の明瞭ならざりしものなり。編者は此等の事

戸を座より出でたるを更に以外とせず、折も本座の廣大なりし規模は實に
 莫遠跡今日の現況を以て知るべく、其鑄造の如きも決して古來の言傳ふるの
 母にあらざりして、他の不知品を座所鑄に偽するもの決して断からざるべし。
 且つ又鑄終りの後、則ち貞享より宝永に至る二十一年間は此座の興廢頗る
 判明ならずと雖も、唯だ元禄年間一二の鑄を女りしことを諸書に載せ古圖に
 依て考ふるも、尙依然として本座の構造を存し、まじ鑄をなし居たるもの、如
 し、彼元禄十三年京都七条河原に於て、茨原と名けし、薄少なるを鑄出して
 より、其本座は宝永五年の宝永大を鑄る迄継続し、大を廢止となりしと共に
 廢座となりしと云ひ、此間元禄時代大に幣制の變革に際して種々なる貨の
 現はるべき時なれば、是等の貨が、龜戸に於て出たるや殆ど疑を容れざるが
 如し、本座の書体の如きは、京と文より轉化折衷せしものにして、元文期の後
 江表に接似せり、云々。

年表 自元禄十年至宝永元年として、駿府第二期を載す。
 貨幣六。 旧譜に四ツ宝大字と名づけたもので、寛字のルの尾が陰起して、
 なるか無きかの如くであるから、幻定寛とも名づけたもので、種も少いが通
 行も非常に勤いもので、書体は寛文の式で、形も大きく、種もなどは大
 々としたもの云々。
 貨幣六六。 逆宝改元以後鑄る所のものは、背文の刮去されたものも夫存
 るべく、此幻定寛も夫なるべく、か、文字の結體頗る寛文期の如に似たり。
 七考。 此座の受負人は、丁字屋味休外一人の様である。

七條座 第一期 鑄期自元禄十三年三月至宝永四年

<p>正字</p>  	<p>斜宝</p>  
<p>背廣郭</p>  	

藤譜 元禄十二年平安七条及江戸口口所鑄銅貨白色、徑八分、小者徑七分五厘、俗曰荻
 原、俗曰荻原也。
 芳譜 正略及江戸龜戸所鑄銅貨白色、徑八分、重八分、小者徑七分五厘、俗曰荻
 原、凡六種。
 三貨圖彙 元禄十三年庚辰三月、京都七条川原にて鑄之、荻原と稱す。御勅
 定奉行荻原近江守重秀差圖、元禄十三年庚辰三月六日鑄之、或文長崎屋不用と
 云。京都西奉行より、檢使御出改有之、同七日より通用を鑄出。或頭長兵衛半七郎
 在老の説に、此後には、鉸々小々成甚だ評判悪く候由、此を鑄終りて直に
 大を鑄候由、大を停止後、此を座潰れ申候よし。

中川 敦宗の称は敦宗重秀の指揮に係り、座に於て鑄たるに依る、此き
 年代及鑄造に就て種々の説あり、板兒録に元禄十三年新嘉京に於て鑄ると記
 し、統化録其他數種の記録皆之に同じ、三貨圖録に宝永大寺の鑄造迄継続せし
 ものとす、(中略)然れども圖する所大小二様の或は何れを平安とし、何れを龜
 戸とすべし、か文章上吏に弁別すること能はず、且つ此兩表製作同一にして大
 より小に變ずるの順序歴然見るを得可く、一座の發行に係ること疑ふ可らず、
 又享保以来幾多の記録此表を詳に記して本譜の元禄十二年平安及江戸の鑄
 造となすは誤りに属し、元禄十三年三月京都七条に鑄始めたるものなり。

龜戸座 第四期 自宝永五年六月至享保九年十月

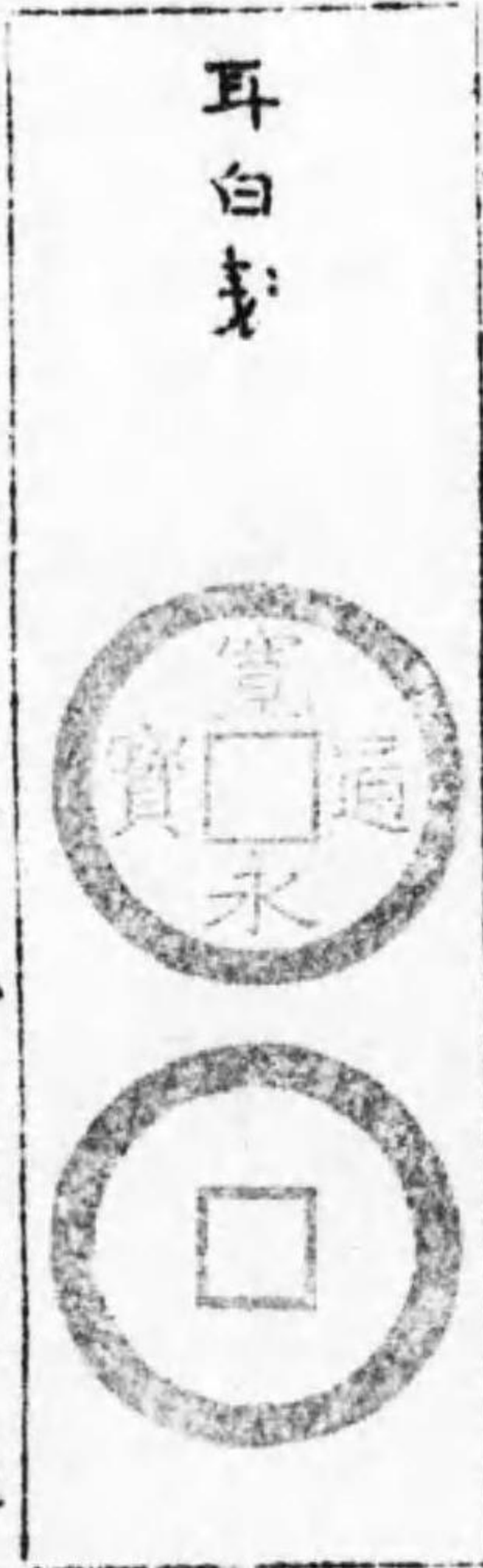


藤譜 宝永五年至正徳四年江戸龜戸所鑄銅質黄色、徑八分強、重一匁、俗曰丸
 屋也。
 名鑑 質文並と等しく、黃褐大様の無背なり、或文肥へて濶く特に通字の頭
 部に於て他に比し甚大なるを覺ゆ。
 貨幣八五 鑄多、重宝記、宝永五年十一月八日命せられ、同十五日吹初め、正徳
 二年十二月廿五日止む、享保五年十一月八日命せられ、同十五日吹初め、正徳



藤譜 正徳初廢、宝永十匁、江戸龜戸所鑄、刮去文字、多幕文爲様、字文肥瘦二
 種、徑八分、重八分。

考譜 (正略) 徑八分、重一匁。
 泉貨鑑 正徳四年甲午年より享保三戊戌年迄、武州龜戸村に於てこれ鑄る。
 面文寛文並の背文を削りて様となす、故に寛文並と少しも異ならず、捺するに
 此表、徑り八分一厘、重一匁、面文寛文並と同じ、只銅の鍊宜しからざるの故、正
 徳四年同時に同所にて此を鑄たるものは、初め頼人江免許ありて、後にこれを
 止ませて、官表を鑄たるものならん、此表は運上もこれなく、吳服所の加役たる
 の由なり。
 名鑑 瘦字文並の無背なり。

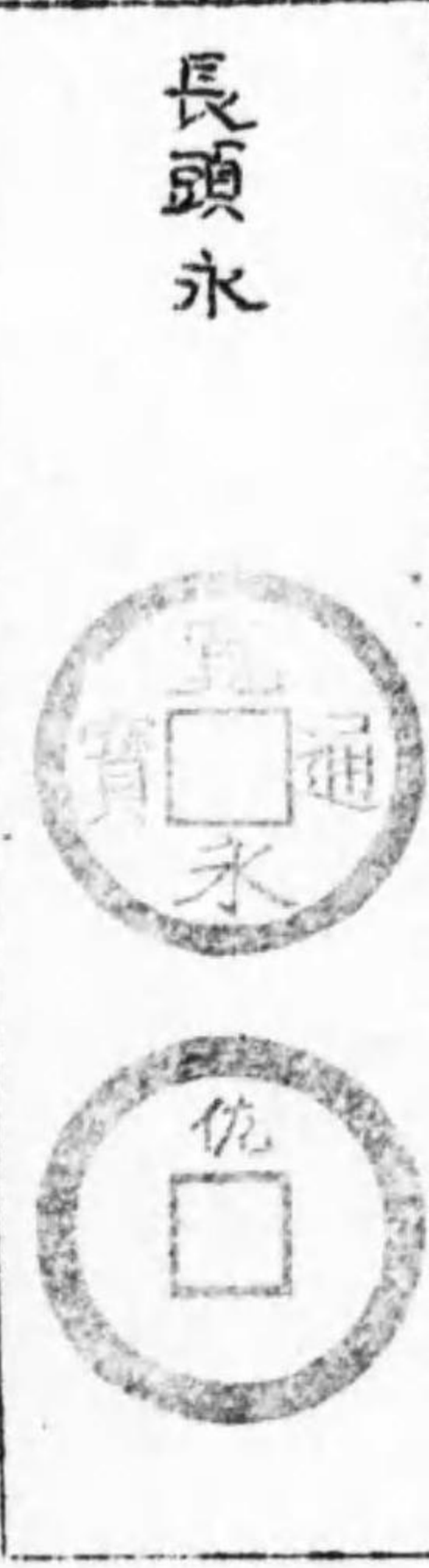


藤譜 正徳四年至享保三年江戸龜戸所鑄、銅色黄色、製作精好、其銘同文字並

懸縁者但無幕文耳、径八分強、重一匁、俗曰耳白、或曰此亦一種有帶白色者疑非矣。

德川十五代史 正徳四年九月七日、淺草鑄所を置く。同年九月廿一日勘定奉行水野伯耆守守美、目付村瀬伊右衛門房矩、山岡助右衛門景寛、勘定吟味後藤岡孫太郎能達、萩原右衛門美雅に鑄所を命ず。同年九月廿二日、吳服師後藤縫殿助茶屋四良次郎、龜屋源太郎、三島吉之進、上柳平次郎、茶屋長曾に令し、寛文の旧例に従ひ鑄造の事を受負はしめ、掛役人の指圖を受けて之を鑄造せしむ。享保九年十月廿四日、淺草鑄造場所止む。私考 徳川十五代史にある淺草は、尾戸の誤りであると思ふ。

佐渡座 第一期 鑄期 自正徳四年六月至同五年五月



藤譜 佐字、正徳四年至同五年、佐渡國相川所鑄、文佐字在穿上、銅色黃褐、径八分、重九分。相譜 正徳四年至五年、(中略)又二種有濶縁者、径八分、五厘強、重一匁三分、此其彫母を未見其子。

佐渡志 正徳四年三月廿九日江戸の商人糸屋八左衛門外四十餘人來り、其座を下戸炭屋濱所に建て、六月朔日より鑄始めたれども、事大にして財用繼がず、明年五月其事を止む。貨幣六六 事座跡今も字を座と呼ぶ、大約五十間四面なるべし。

佐渡座 第二期 鑄期 自享保二年六月至同二十年十二月



藤譜 佐字、享保十年佐渡國相川所鑄、其銘幕文字、背文穿上有佐字、銅質黃色、徑八分強、重八分、此亦背文結構有數種。相譜 享保年間佐渡國相川所鑄、(中略)其様異相同故圖略之。佐渡志 享保二年より同十九年に至る、官局を相川一丁目濱町に建て、田島與兵衛、天野屋傳右衛門を総へしめ、六月より鑄出す所、凡一年一萬貫文に及ぶ。同十九年閏東に申して、明るし卯の年より請負となる、之れ運上を召さん、が爲り、受買人は相川の人宗兵衛なり。泉志 鉄割永、享保二十年佐渡座所鑄、其の文は径小なるのみならず必ず永往跳ねざるを以て、官局と區別す。貨幣六六 事座跡は第一期の所よりは三町程隔たりし海岸にて、周圍約一

厚肉



藤譜 享保十三年至十五年板津国難波村所鑄此多大小二様並銅色紫褐徑九分重一匁小者徑八分七厘。

箱譜 正應此多大小三種有細縁者面背輪郭高而字文卑銅色紫褐徑九分重一匁小者徑八分半厘。

板兒録 享保十三年正月より大坂道頓堀側南裏新屋敷辺にて新戈を鑄る一月十五日迄を得たり重一匁十釐にて十匁有り常々より少し厚し文戈に似

輪郭太く赤色なり同年十二月停止し其後又鑄る。

名鑑 寛字のハ畫貫かざる細字にて俗にハネ永云々。

泉志 此座の受負人は中村忠兵衛丁字屋喜兵衛島屋嘉兵衛の三人なり。

仙臺座 第二期 鑄期自享保十三年正月至同十七年十二月

マ通



コ通



無背文



藤譜 仙字並享保十三年至十七年陸奥国仙臺石巻所鑄銅質有紅褐紫褐二品徑八分五厘重一匁小者徑八分幕文仙字在穿上結字大小二種此多非皆幕文

鑄所初見時一纏百匁兩端一多各置幕文仙字者。按一種有銅色純赤者至夥矣。

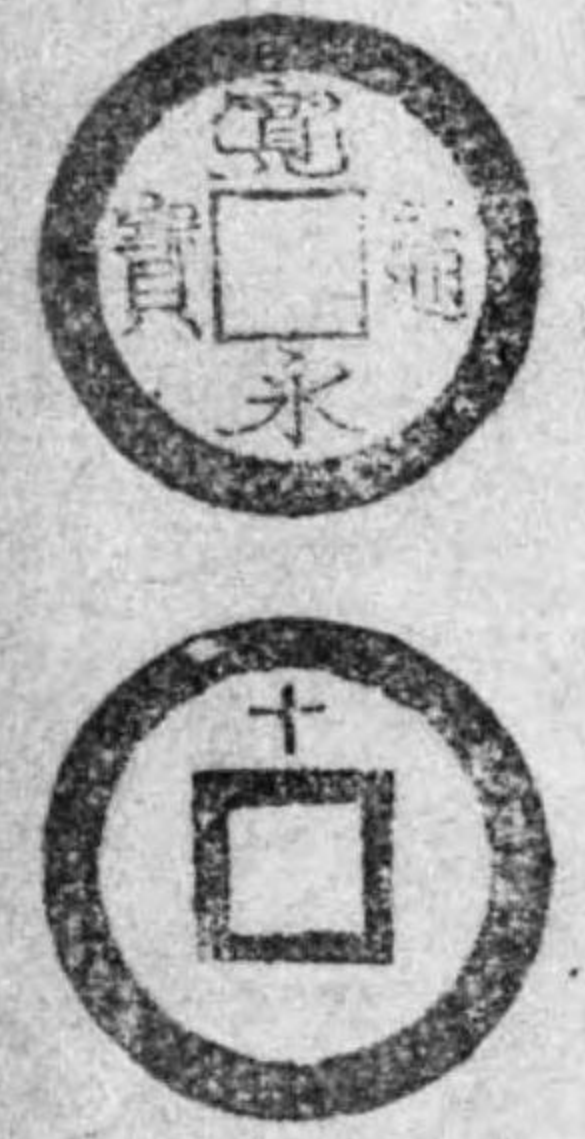
板兒録 通用者は無背也。百文繫て兩端仙字背を以て辨之と云。

泉志 此座の受負人は瀬川八十二田中惣七家城太良次の三人なり。銅色

純赤とあるは母戈のことにてもあるが、銅のもの少なり。純赤とあるは石巻新田町に所在するもの此を仙臺座と稱する。敷地五町一及七町十八歩、建坪千三百五十七坪、鑄額四十五萬貫である。



十万坪座 第二期 鑄期自元文元年六月至寛保元年五月

背十



輪小十



輪大十 銅鉄		無輪印 銅鉄	
			

寛延尾		小字 銅鉄	
			

藤譜 十字元元文元年深川十方坪所鑄銅色黃白幕文十字在穿上後止幕文
置十字於肉郭如鑿記不常其處徑八分重八分輕者七分又有無幕文及肉郭之十
字者又此有鐵者摸狀皆同銅者。十字鐵者說見上。
縮譜 正略銅色淡黃徑八分重九分幕文十字有穿上。按此多疑稟官樣也其
未其子又一種有鉄者面文与肉郭十字者見通後止幕文
置十字於肉郭如鑿記或一或二或三不常其處徑八分重八分輕者七分又有肉郭
十字小者常有通上不移其處未見鉄者又有無幕文及肉郭小字者。
中川 藤譜及芳川譜共に鉄者のみを別記して背十字者肉郭十字者同録せ
り。縮垣譜は之を分ち却て銅鉄の別をなす其心して誤むべし又十字者肉郭
に記するもの二種あり其印の小なるは直ちに彫刻母事に鑿記す故に其位置
に變動を見ざるも大なるものは錫母事に極印せしを以て其位置一定せず乃

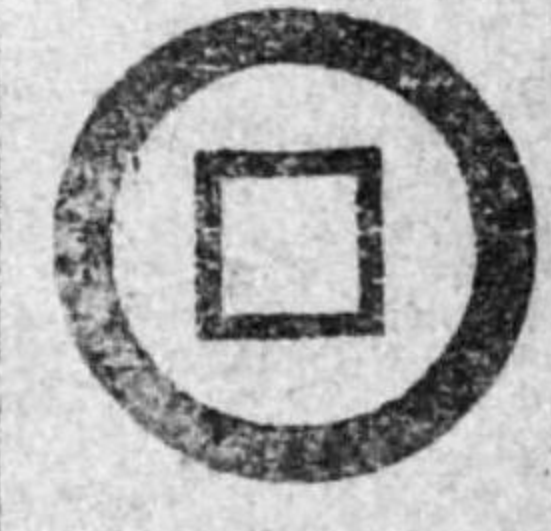
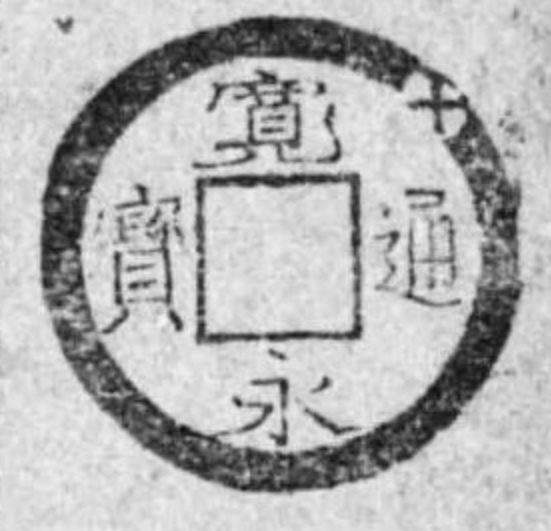
ち上下左右或は二印三印有り此種多く鉄となり。縮垣譜後章に於て夥しく菟
銀す之量も元末際りあるものにあらず。
収兒録 元文元年五月十五日被仰付。
水志 鑄是は歲額十萬貫文五今年の間之を鑄。
只幣七三 背十字者元文元年六月廿五日より十月十日迄四ヶ月に出下
るものとす本品に母と子とあり其區別を中るがせにすべからず。小十
貫は元文元年十月十一日より鑄出す所の八分とす銅色のみにて鉄色なし

鳥羽座 鑄期 自元文元年九月至延享二年

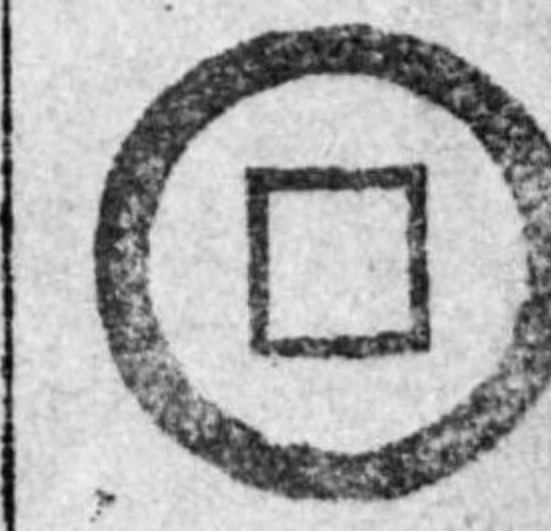
昂永		濶縁	
			
細縁		小字	
			

藤譜 元文元年山城国鳥羽横大路所鑄俗曰清水者銅色黃濁徑八分重八分。
芳譜 全略稀有白色。

輪大十
銅鉄



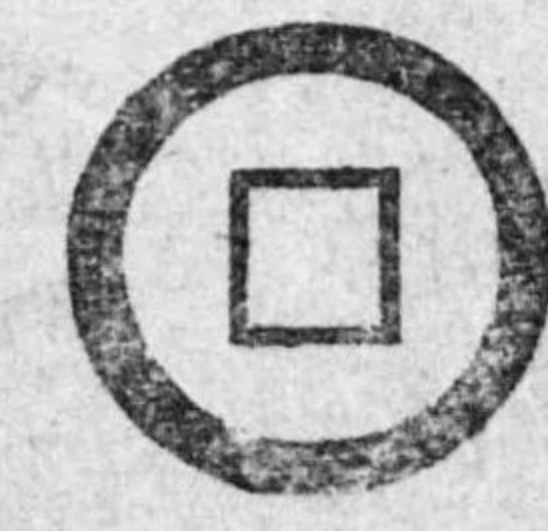
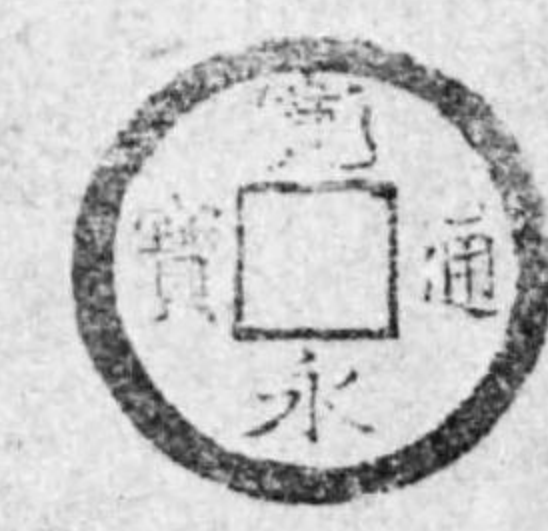
無輪印
銅鉄



寛延尾



小字
銅鉄



藤譜 十字元元文元年深川十方坪所鑄銅色黃白幕文十字在穿上後止幕文
置十字於肉郭如鑿記不常其處徑八分重八分輕者七分又有無幕文及肉郭之十
字者又此有鐵者橫狀皆同銅色。十字鐵者說見上。
縮譜 正略銅色淡黃徑八分重九分幕文十字有穿上。按此多疑東官樣者矣
未其子又一種有鉄者面文与肉郭十字者同至鈔其肉郭十字者見(通)後止幕文
置十字於肉郭如鑿記或一或二或三不常其處徑八分重八分輕者七分又有肉郭
十字小者常有通上不移其處未見鉄者又有無幕文及肉郭小字者。
中川 藤譜及芳川譜共に鉄者のみを別記して背十字者肉郭十字者同録せ
り。縮垣譜は之を分ち却て銅鉄の別をなす其心して誤むべし又十字者肉郭
に記するもの二種あり其印の小なるは直ちに彫刻せしに鑿記す故に其位置
に變動を見ざるも大なるものは錫母身に極印せしを以て其位置一定せず乃

ち上下左右或は二印三印有り此種多く鉄となり縮垣譜後章に於て夥しく蒐
銀す之量も元末際りあるものにあらず。
反兒派 元文元年五月十五日被仰付。

大全 願人橋本平七郎外二人。五今年の間之を鑄。
元年六月廿五日より十月十日迄四ヶ月に出た

るものとす本品に母身と子身とあり其區別を中るがせにすべからず。小十
貫は元文元年十月十一日より鑄出す所の八分重とす銅色のみにて鉄色はし

鳥羽座

鑄期 自元文元年九月至延享二年

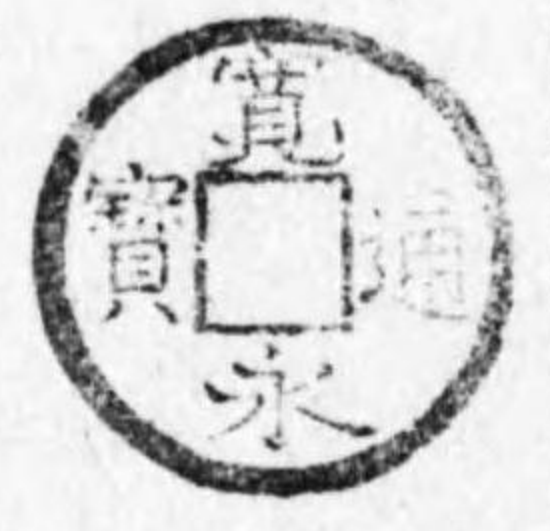
昂永



濶縁



細縁



小字



藤譜 元文元年山城国鳥羽横大路所鑄俗曰清水銅色黃濁徑八分重八分。
芳譜 (上) 鑄有白色。

諸譜 (正略) 銅色赤濁。
 泉志 額人清水清右衛門近江屋小四郎。
 名鑑 色紅褐。
 貨幣二七 元文元年より延享二年まで。

大 様



小 様



羽 縁



藤譜 元文元年鳥羽横大路所鑄俗曰有來其銅色黑濁徑八分重七分製作不精。

納譜 元文元年至四年。

泉志 額人有來新兵衛山城屋三右衛門。今日人の有來未とす所のものは帯赤黄色のものもあれど多くは帯黄白色のものなり。面文不同筆の模範。名鑑 灰白不旧字。
 鑄貨 元文元年より延享二年まで。

可揚物縁 其を別に懸して。
 藤譜 元文元年鳥羽横大路所鑄銅色淡黄又白色徑八分五厘重一匁小者八分。

芳譜 (正略) 小者八分凡二種。
 中川 藤譜は此章に於て今日所謂享保七条手の大様なるものを圖し、芳譜は更に寛字の凡落ちたるもの新撰寛永手譜に加島手として、芳譜の加へたり。統化蝶美苑には上圖の母を清水有來手の外にして鳥羽横大路に鑄たる鉄手なりとし泉貨鑑も亦た之を掲けたり然れども本譜は此手不知品に列したるを以て見れば藤氏も前説を改めたるものと覺ゆ。此手亦疑問の一なり世稱して鳥羽の別種と云藤氏始め鉄手として永字の改収たるを圖し是に改めて本品を擧ぐ錢體七条手と異無し。
 貨幣一〇七 享保十一年京都七条手座のものは宝永手に似たる寛永手數種の中より選定したれども其手は元文元年下鳥羽横大路を座の遺跡より發見すること多きを以て訂正すべきものなり。
 泉志 清水及有來其共銀五万貫。
 私考 この大様手は七条手によく似て居る。此は有來手の一様である。

伏見座 第一期

鑄期自元文元年至同四年

背中濶縁



背大濶縁



藤譜

元文元年山城国伏見所鑄銅質白色製作不精径八分重八分一種背有

大

全 額人近江屋市兵衛。

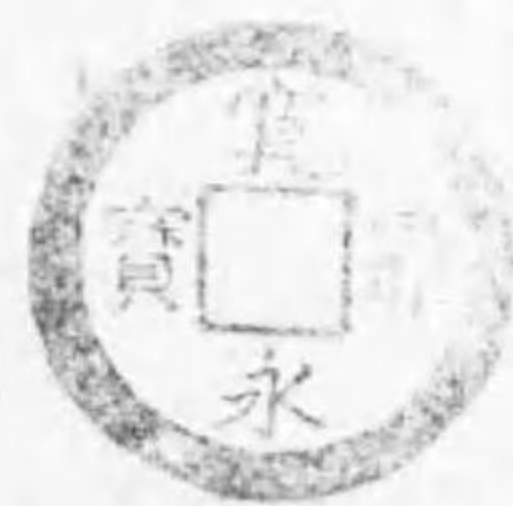
藤所座

鑄期元文元年

織字



細字



泉譜

近江国膳所所鑄不詳径八分重一匁銅色黄濁母多其子少。芳川維堅は元文元年となす。

猴江座

鑄期元文元年

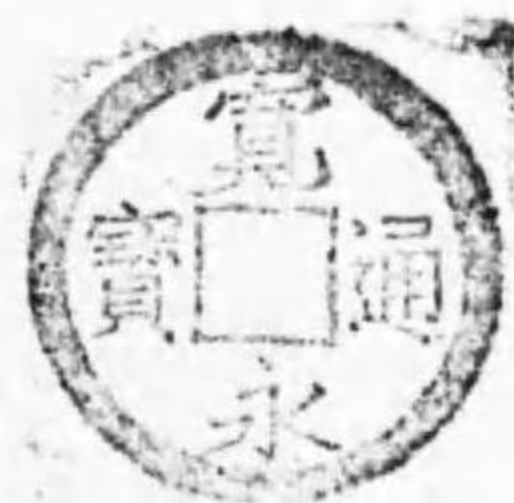
廣穿



中穿



狹穿



藤譜

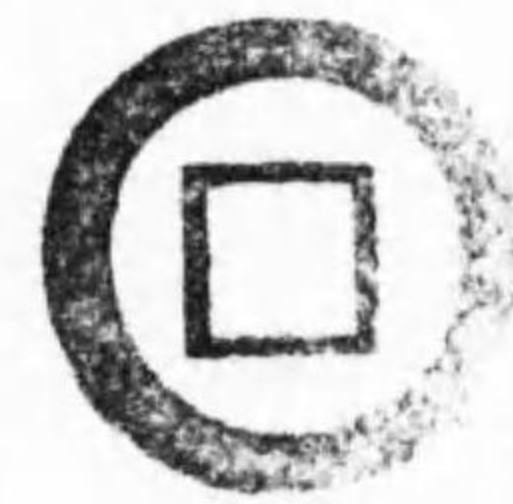
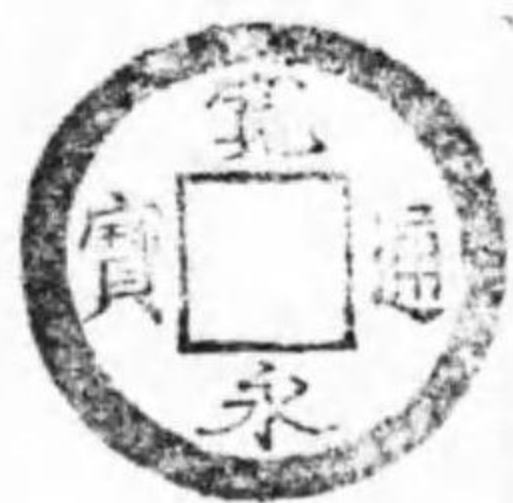
元文元年下總国猿江所鑄径八分重八分此有兩種一銅色紅黄一銅

色淡黄帶白色。中川 統化環美苑に妹尾氏の猿江と面文大に異なり鳥羽伏見或は美又云妹尾氏の猿江と藤江の仙臺後鑄平文なりと二説不分明後の考へる位つ云々。妹尾氏の猿江と説は板見録に元文二年巳中春江戸猿江と云所にて去長年より寛永新多を鑄る堅道律師に二文貫ふと云れば今日の前にて考れば妹尾の説據るところありと云可し益し此二説の衝突は当時判定に苦みたりと見、統化環を初め泉貨鑑其他叢譜皆此説を存し合せて猿江と稱し来

和歌山座

鑄期自元文二年正月至寛保三年四月

正字
廣穿



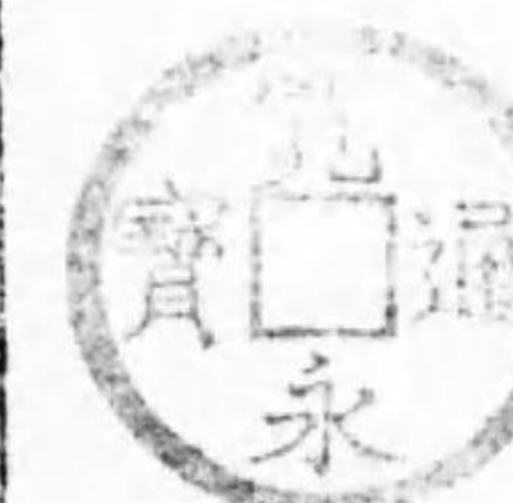
千本永



廣郭



狭穿



藤譜 (正字廣遠元文元年紀伊國若山所鑄、径八分、重七分、銅色黑濁、製作不佳)

今本永、廣郭、狭穿、不知治鑄所品。

泉志 咸願八分、重七分、鑄る。

貨幣七七 銅、弘元文二年正月より寛保三年四月まで鑄る、受負人土屋市太夫、後に加入熊野屋彦太郎、伴彦次郎、銀主江戸松葉屋伊右衛門。守津は市太夫の居村の名、中の島は彦座の所在地。

小字
背一



同上
無背文



長寬
背一



同上
無背文



廣穿
小樣



併永



以上、銅質銅、銅又鉄にて小樣。以下悉く鉄質にて大樣。

輪凡一



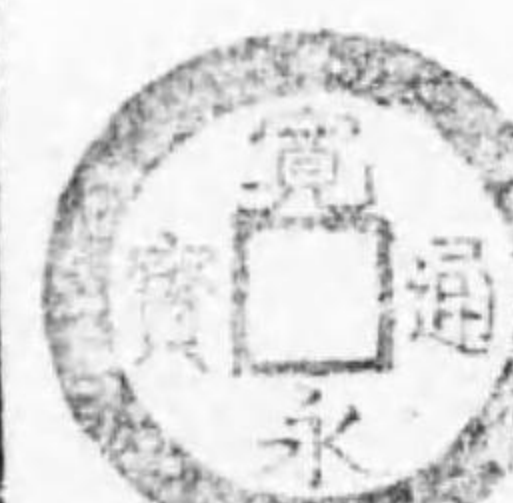
同上
堅凡一



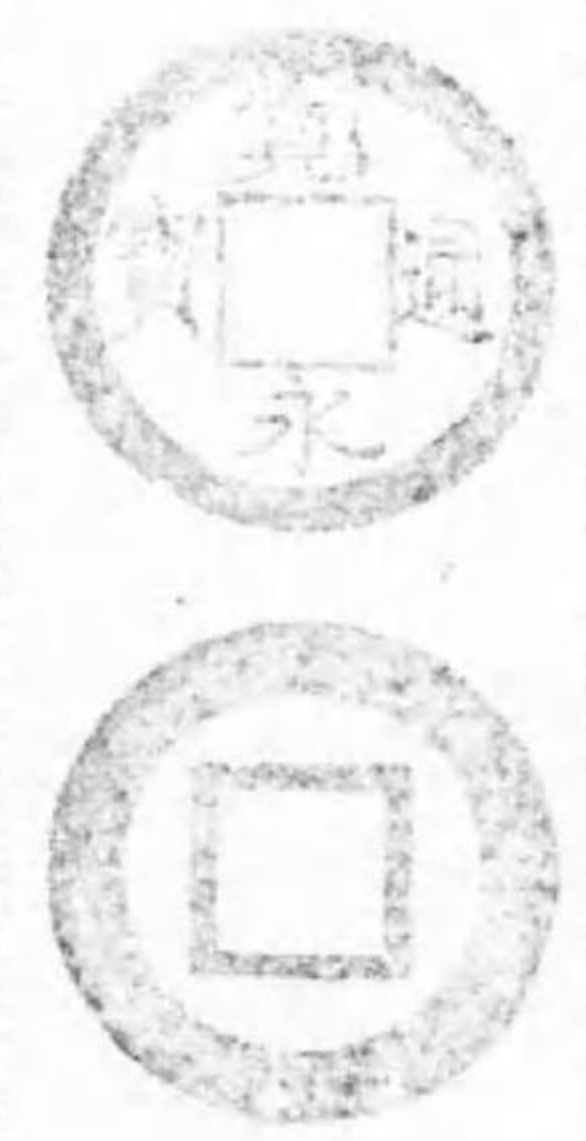
廣穿
肥字



淵縁



鐵 寬延尾



鐵 廣大穿樣



鐵 背廣郭



鐵 廣穿



藤譜 (俗永寬延尾) 元文元年紀伊國宇津及中島所鑄今混不可知並舉後後考
 一徑八分五厘重九分一徑八分強此更有銅質是鐵質之世也
 芳譜 元文元年紀伊國中島所鑄有二樣一徑八分五厘重九分一徑八分強按
 此其徑八分強者樣多矣
 縮譜 (正略) 有五種一徑八分五厘重九分小者徑八分重八分
 中川 (正略) 又銅鐵二品云云其銅質是藤譜不知品に置くと云ども其質
 紀州其類在し
 貨幣 七六 若山鑄書錄 元文元年八月於御國鑄書仕候儀公儀江は仰
 達相濟候に付鑄書仕通用致候様被 仰出宇津村市太夫江可申付云々右鑄
 書十箇年之間被 仰付右草郡中之島村領同島ノ内御用地申付鑄書所ニ相成
 候事 右地面五十六百坪 元文二已正月見せ其江戶江差出但目方一七七分
 二百廿三貫五百文を鑄
 大全 其文筆右塔川八右衛門

七八厘より八分二三重位迄但し一貫文より七厘七十二厘江戶より來候新式
 と同形大樣同前色合も同様、相見候事。同三月江戶表新式文金一兩二四貫
 文替にて其座より兩替屋江可賣渡被 仰渡候由江戶より申來る。
 貨幣七七 受買人は前掲。自元文二年至寬保三年中ノ島其座計鑄書、銅
 貨元文二年正月起、至寬保三年四月止。鐵貨元文五年四月起、至寬保元年
 五月止。其座取押延享二年七月。銅貨十二万六千二百四貫文、鐵貨三万八千
 二百廿三貫五百文を鑄
 小梅座 鑄期自元文二年二月至寬保二年

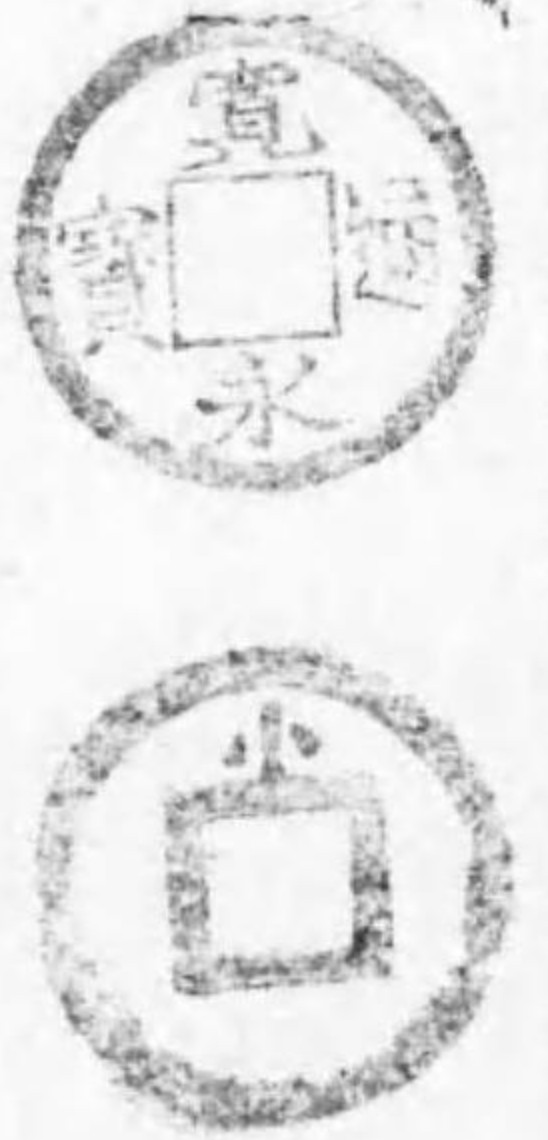
狹穿



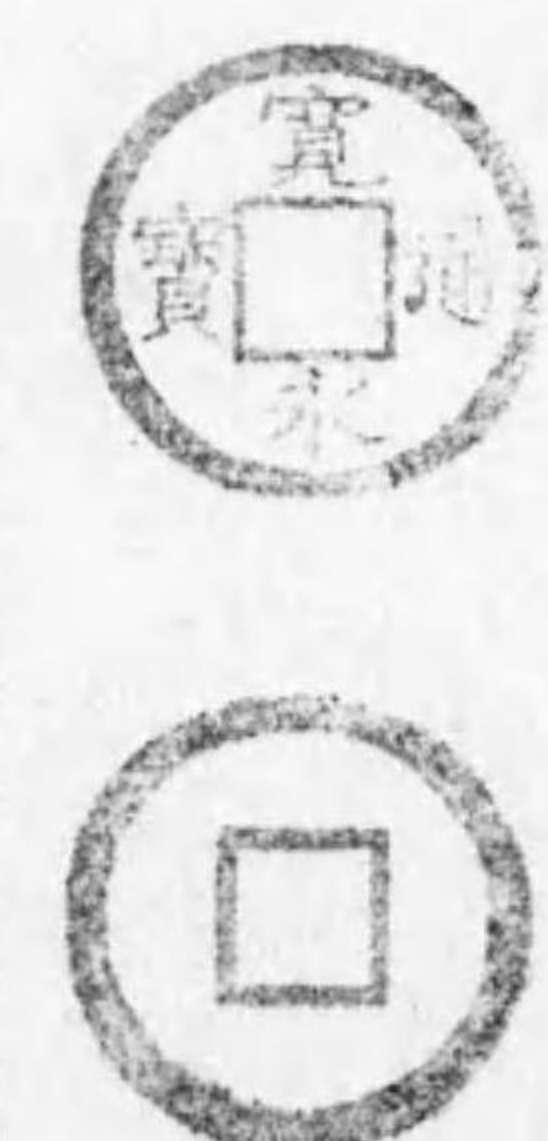
廣穿



肥字



無背大



銅、鉄

其人相馬徳之丞外三人である。

銅、鉄

同 上
俯 永



藤譜 小字者。元文元年下總國小梅所鑄背文小字在穿上。銅色紫褐。徑八分。重八分。小者七分五厘。重不過五分。小字鉄多。說見上。(廣安肥定。徑八分。重八分。比多有銅身鉄身各二種。又一種有無幕文者。)

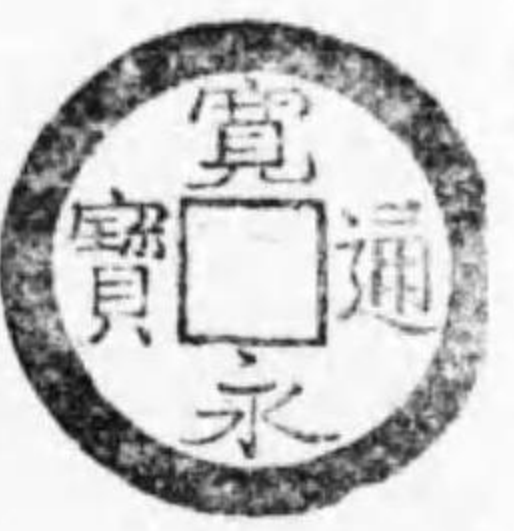





芳。相譜 各二種の下八字なし。
板尻録 元文元丙辰十月廿日被仰付。

大全 (上略) 又一種有無幕文。相譜剛又以下八字省其圖。如有見者。芳譜剛文而再置模形。今據藤說圖無背若干。芳譜又曰。頼人野島新左衛門。瀨川八十二。

泉志 歲額十五萬貫七ヶ年間之を鑄。
貨幣二四 元文元年十月廿日。準許。翌二月一日より吹初め(中略)寛保二年迄引続き鑄造。

日光座

鑄期自元文二年七月至同三年五月

<p>正 字</p>  	<p>長 字</p>  
<p>背瀾縁</p>  	

藤譜 (正字) 元文二年下野同寂光寺所鑄銅色黑濁。製作不精。徑八分。弱重七分。(長字) 不知品。

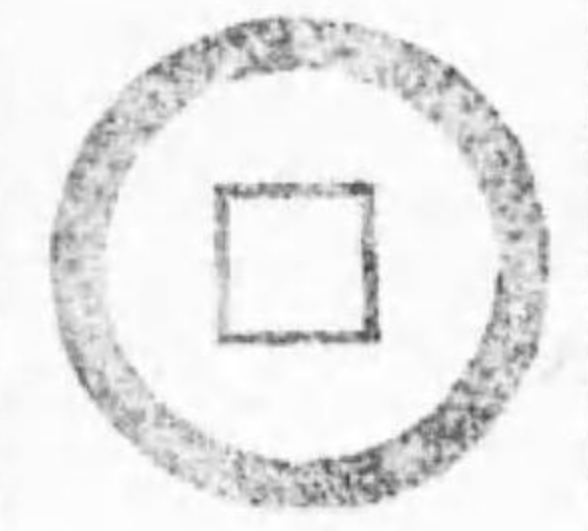
芳譜 長字者。加小。
私考 鑄時は古雜記にあると見出して記した。吹始めは元文二年七月十日とある。又、泉座の所在地は日光所の内。旧久次良村の寂光寺である。定員人相馬徳之。巫外三人である。

龜戸座 第五期 鑄期自元文二年閏十一月至延享二年

廣穿



中穿



狹穿



藤譜 元文二年江戸龜戸所鑄徑八分、重八分、銅質黃褐二品、或曰此等二種不知是後後考。

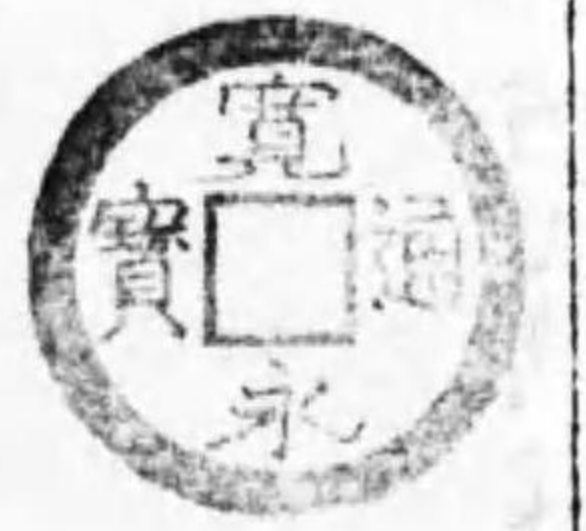
芳譜 (上略)有二種、徑八分、重八分、銅質黃褐或以下無し。

泉志 元文元年丙辰五月より延享元年甲子に至る九年。受買人三木彦右衛門外一人。毎月百五十貫文を鑄。

私考 或る旧記に、元文二年閏十一月四日鑄始の延享二年に止むとある、この説疑かたらん。

秋田座 第一期 鑄期自元文三年五月至延享三年五月

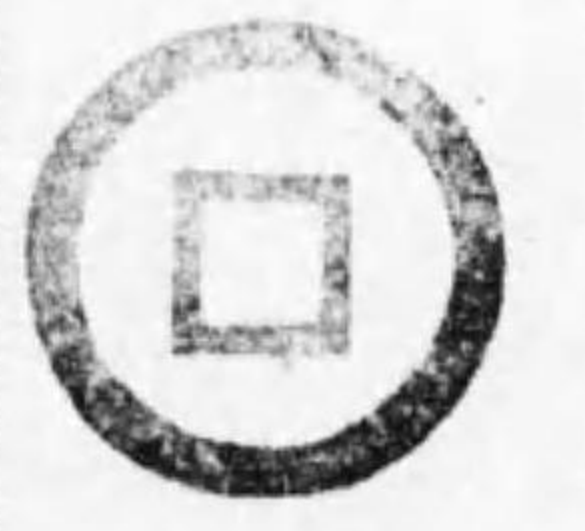
大字



小字



異永



藤譜 元文二年出羽国秋田所鑄銅色紫褐或黒濁、其様凡三種、徑八分、重八分、小者徑七分五厘。


芳譜 (上略)其様凡五種云々。

泉志 元文二年此銅は出羽秋田銅山に於て之を鑄造し、十年の間歳額十萬貫文を鑄。受買人岩井新五郎外六人。

私考 旧雜記により元文二年に允許を得、三年五月鑄始したものと認める。

加島座

鑄期自元文三年八月至延享四年

<p>銅鉄 細緑</p>  	<p>銅鉄 小字</p>  	<p>鉄 濶濶 永緑</p>  
<p>薄肉</p>  	<p>鉄 大字</p>  	<p>鉄 同縮 永上</p>  

藤譜 (瀬永・編永) 元文三年至六年攝津國加島所鑄、径八分、重八分、有二種。
 細譜 (上野) 重八分、銅質黒濁、又有白銅鐵者、或曰有背文、身上置加字者、未見之。
 中川 此者亦一疑問なるを、にして諸説紛々たり、藤譜及芳川譜は鉄者のみ
 とし、細垣譜に至りて銅者鉄者ありとなす、統化、蝶、美、死、加、島、の、事、を、記、す、る、甚、だ
 詳かなり曰く。元文三戊午歲被仰付、振州西成郡上中島加島村にて鑄る初
 は銅を鑄る今世希し、面文長崎屋不喜模範、元文四年の末より鉄を鑄る

同五年正月廿日より賣出す、時の相場より金壹両二八十分、銅壹両二八十分、鉄壹両二八十分。
 此後段々出所の鉄者とは、其質宜しきなり。面文銅者に同じ。此
 全文は和漢泉貨も引證して、刻圖を掲げたり、然れども其圖不鮮明にして、未だ
 実相を伺ふ能はず、其文章より推せば、其文不日筆模範たること明かにして、未だ
 く前圖のものとは異なるを、覚ふ、近く友人得る所の鉄者あり、製作藤譜の下島羽
 走、則ち享保七条支の大様なるものより、換す、精好、比、魚、し、或、是、加、島、鉄、者、に、係、る
 か、古永堂曰藤譜の加島支とするもの、全く不知、年代品に属す。
 名鑑 四年以後の鉄者には、數種あり、母支は黃褐にして、背郭廣きを例とす。
 鑄貨及年表 元文三年より延享四年まで。
 以下二項旧譜鳥取支に對して
 縮譜 (大字、小字) 延享元年因、始國所鑄、径八分、重一匁一分。
 名鑑 延享元年因、始國所鑄、径八分、重一匁一分。
 其の小様、小字の品は、割合に少し。
 貨幣一八 加島鉄者、座探訪記 (編者巧記) 支座跡は、俗に「センガ」と呼び、約
 一町四方の土地で、高さ約三尺、現今は、雜草繁茂して、防水布製造場及び、乾煤場
 に使はれ、居る、先づ、一町して、磨輪瓦の破片を得た、(中略) 社務所に
 大破片とを得た、(中略) 街道の南に在る、香貝波志神社に、参詣した、(中略) 社務所に
 て、枝束の鳥居及び、磁石、埴埴、並びに、鑄支、仕用、帖等の、披見を、許された、(中略) 支
 は、延享鳥取大字 (每支) 一匁、如何に、不審に、思はれた、結末に、延享元年二月一日
 と明記してある、(中略) 当支座で、鑄造した、のは、確かである、云々、大正七年三月
 大阪古泉會第八十七回例會に於て、鳥取支の加島支説に、存疑せられた、ことが

あつたが、今回の探訪記により、一層精確に知るを得た云々。
 泉志 十ヶ年間城額十萬貫鑄。変員高屋宇兵衛外二人。







押上座 鑄期自元文四年六月至延享三年

大字		
小字		

藤譜 元文四年下總國押上所鑄、径八分、重八分。
 統化蝶 元文四年六月より吹出す、白目、金一兩、四貫文。鉄、金一兩、四貫文。
 二百文。六ヶ年間、鐵三萬貫乃至七萬貫文。

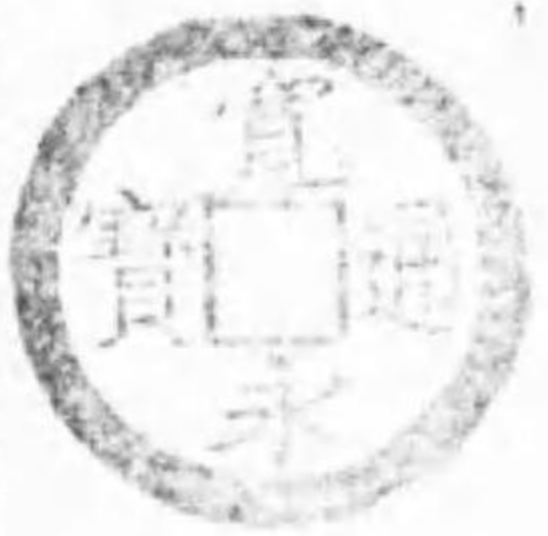
泉志 大全 頼人佐藤深兵衛外三人。
 名鑑 (上略) 銅子等の鑄造も又りしものと見ゆ。
 私考 或る旧記に、元文四年六月廿四日、延享三年とある。この座に銅のありし由、さすれば次載の白目等は当座の鑄であるまいか。

平野座 鑄期自元文四年六月至寛保元年二月

白字目		
細字		
白字目		

藤譜 (白目) 中字、同小字、元文四年江戸深川所鑄、俗曰之呂女、銅色似以鉛鉄和標、径八分、重八分、有二様、此其鑄初見時、以一千二百貫、銀六十貫、(鑄定) 不知居。
 芳譜 (上略) 一種有帶黄白色至妙。
 統化蝶 白目、元文四年二月廿二日被仰付、江戸深川平野新田。
 中外形史 元文四年深川平野新田所鑄の事、俗に之呂免と云、其金質を考るに之呂美の誤ならんと。
 泉志 元文四年深川平野新田に於て之を鑄る、三ヶ年の間、城額十五萬貫。
 大全 頼人山田新右衛門外二人。
 鑄貨反年表 元文四年二月より同六年(改元寛保)二月迄。
 私考 二月廿二日、元文四年六月廿八日始鑄と或る旧記に基く。

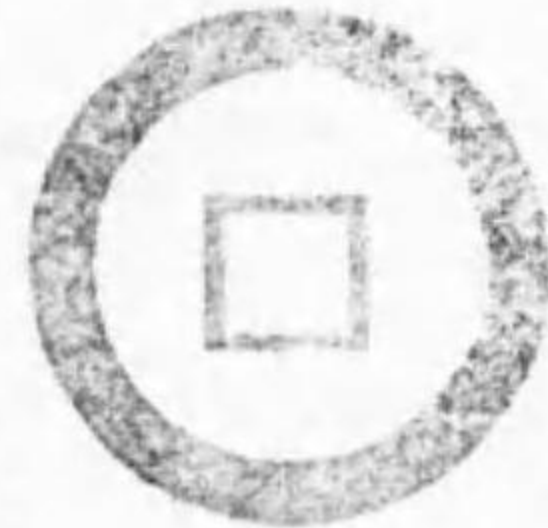
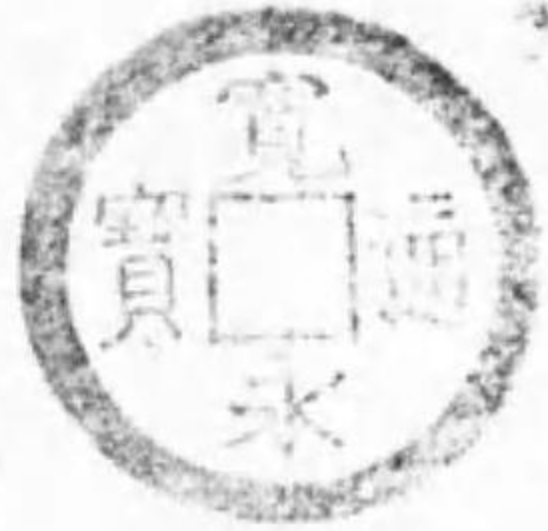
背仙



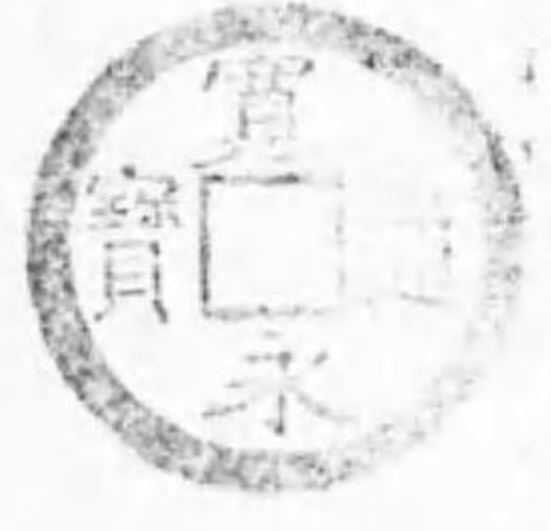
斜字大



俯永



長通



縮通



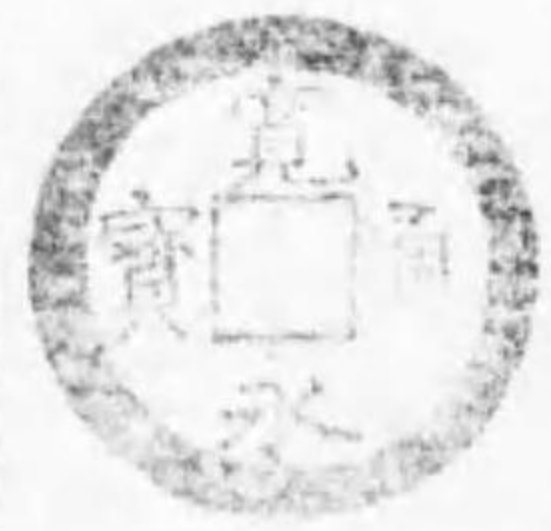
藤譜 仙字、元文二年陸奥国仙臺石巻所鑄銅質紫褐淡黃白三品、径八分、重八分、幕文仙字在穿上。幕文說見享保十三年所鑄者。
 芳譜 (上略)七種幕文者一種在此中。云々。
 箱譜 (上略)七種幕文者一種在此中。銅質紫褐淡黃白、径八分、重一分、小者径七分、重七分、幕文云々。

大全 (上略)又一種元文二年。同所所鑄者。藤譜質三品。幕文說同前云。箱芳二譜。石巻所鑄七種。幕文一種在此中云。蓋藤譜因從味尾譜其無背文者概爲猿江也耳。泉貨鑑。獨而說疑不次。今按恐味尾氏始誤矣。願人大坂屋吉良右衛門。泉志。無背文のものは延宝龜戸とす。歳額七万貫を鑄たり。遊仙堂。藤譜の元文二年石巻座も別ち味尾の元文元年猿江所鑄とす。ものをも以て之に充てられしが、余は石巻説を信するものにして銅質文字に就ても藤譜に左祖するものなり。私考。此座の鑄時は表記の通りである。

藤澤座

鑄期自元文四年十二月至同五年

正字



藤譜 元文二年相模国藤澤所鑄銅色紫褐、径八分、重一分。
 中川 藤譜に圖したるは方今深川とすものなり、泉貨鑑に藤沢とす。しは第二圖の多なり。瀬尾柳斎元文三年の記に、江戸藤沢にて新事を鑄る由半七に二文貫なり。半七とは當時の多商なるが如し。藤沢は宿駅の藤沢に非ず、足柄郡藤沢村なり。半七とは野宗明云、藤沢は銅色黒色を合少享保七条より濶縁なりと云深川とは最濶縁なりと云、両者并別の料價に之に過ぎず。

大 全 額人須藤平藏。
 名 鑑 不旧手の小様小字並にて銅色黒褐他の同模範なる七条を伏見と
 は一見して異りあるを知る。
 貨幣七六元文四年十二月相模国足柄上郡玄倉銅山。元文年間同郡吉田
 島村。多座は酒匂川に架する十文字橋の東側にして古く三野笠之助と云小
 役員小田原藩より吉田島役所に出張し鑄造を監督せしと。多座敷地三町歩。

佐渡座 第三期 鑄期自元文五年三月至寛保元年

大 様	狭 佐	大 様	細 緑
鉄	鉄	鉄	鉄

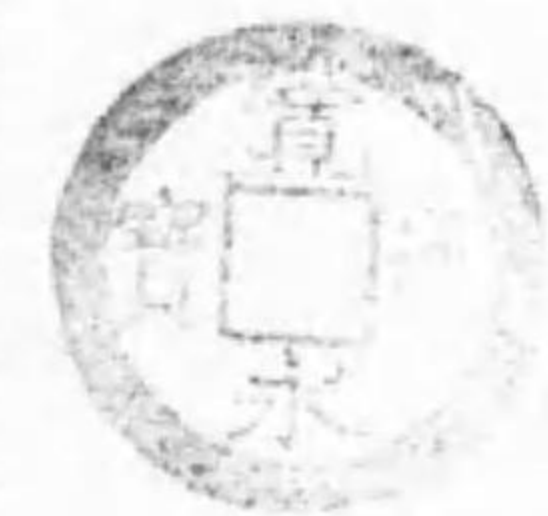
無背文 大 様	銅 銭	同 様 小 様	銅 銭
銅 銭	銅 銭	銅 銭	銅 銭

藤譜 (狭佐) 佐字並、佐渡国相川所鑄、年徑八分、重八分、一種有無幕文者。
 (彌佐) 佐字並、徑八分、弱重七分、幕文佐字在穿上、此身二種並銅質兼慮、製作不佳。
 (天様) 佐字並、徑八分、強重九分、背文佐字在穿上。(魚背文) 徑八分、弱重七分、小者
 徑七分、銅質製作不精。
 芳譜 (狭佐) 按此身今存者尠矣。(天様) 一種有幕文結體異者。(魚背文) 徑八分
 弱重七分、五厘、小者徑七分、重六分、銅質製作不精。
 稻譜 (狭佐) 有銅質鐵身。(彌佐) 此身以下十三字無し。(大様) 小者徑八分、重八
 分、亦有無背、徑八分、弱重八分。下二品未見其子。(魚背文) 小者徑七分、此身銅質及
 有鉄身。
 佐渡志 元文五年より寛保元年に至るの間鑄造。元文五年三月より鑄束
 れる銅の外の鉄を並べ鑄ることを許され、寛保元年運上を増すべし爲
 に銅の重さを減じて八分にせられけるが程なく其の年の内に銅鉄の並と
 もに鑄ること止みたり。
 私考 額人は宗兵衛、鑄高一万貫文。

小名木川座

鑄期自元文五年七月至延享二年

鉄 片川



鉄 兩川



鉄 對川



藤譜 川字鉄壹、江戸深川小那岐川所鑄川字在肉郭如鑿記或一或二不常其處徑八分重八分。

芳譜 (上略) 凡二樣川字肉郭如鑿記(略)又一種有不置川字徑重並同。

板見録 川口銚子元文二年丁巳年被 仰付江戸深川扇橋小名木川座金屋木田六次郎。

年表 自元文五年至延享二年。(訂正の分)
私考 受買人木田六次郎外二人。鑄額十萬貫文。
開鑄は元文五年七月十九日。

飯田座

鑄期自元文五年七月至寬保元年五月

鉄 正字



鉄 玉点室



芳譜 明和二年至五年甲斐国飯田所鑄徑八分重一錢有二種。
泉志 甲斐国志、元文五年申年於府中横沢鑄鉄多事より同年七月十九日
り始め翌寬保元年五月御差止に在る。
大全 事文筆者木田平右衛門。

高津座

鑄期自元文六年^{改元}五月至延享二年八月

濶縁



斜室



狹穿



廣穿



藤譜 元字、寛保元年、高津所鑄銅質黃白二品、模形二種、徑八分五厘、重一匁、小者徑七分半、幕文元字在穿上。

芳譜 (上略) 銅質黃黑、模狀有肥瘦、肥者六種、瘦者四種、(中略) 一種有無背文、其他有大小異者、圖略之。

中川 箱垣譜の魚背文、なるもの未だ座を不詳。統化、珠美、茨云、大坂高津新地鑄、銀座より加役、徳倉長右衛門別段御用座に付、被仰付、寛保元年、酉年より鑄之、面文三様、大中小三形有之。

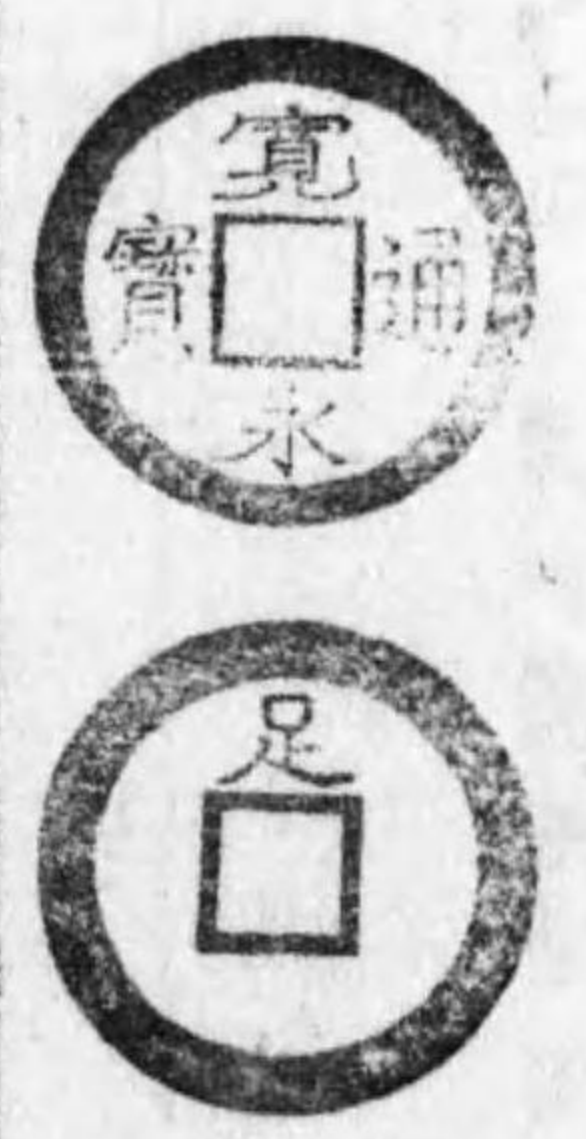
元文五年十一月より大坂高津新地に於て、銀座より加役別段御用座にて鑄る所、所伝、萬額二十万貫文、重七分。

浪華文庫 延享二年、九月朔日、遷轉す。貨幣秘録 寛保元年、酉五月より延享二年、乙丑に至。私考 本座の免許は元文五年十一月、鑄を開始は翌六年五月、即ち改元し、内寛保元年である、背文の元の字は年号の標記であらう。

足尾座

鑄期自寛保元年十一月至延享二年

大字



小字



藤譜 足字、寛保二年、下野国足尾所鑄、幕文足字在穿上、銅色紫褐、徑八分半、重一匁、小者徑七分半。

芳譜 寛保二年、下野国深田郡足尾所鑄、凡二種、(上略) 凡三種、小者徑七分半、重八分。

名鑑 (上略) 大字、元字、小者、重八分、小字、重七分、鉄あり。自寛保元年至延享二年、(訂正、分) 額年四万貫文。額人星野與左衛門外二人。鑄額年四万貫文。額座は寛保元年十一月廿七日。鉄は試鑄であらう。

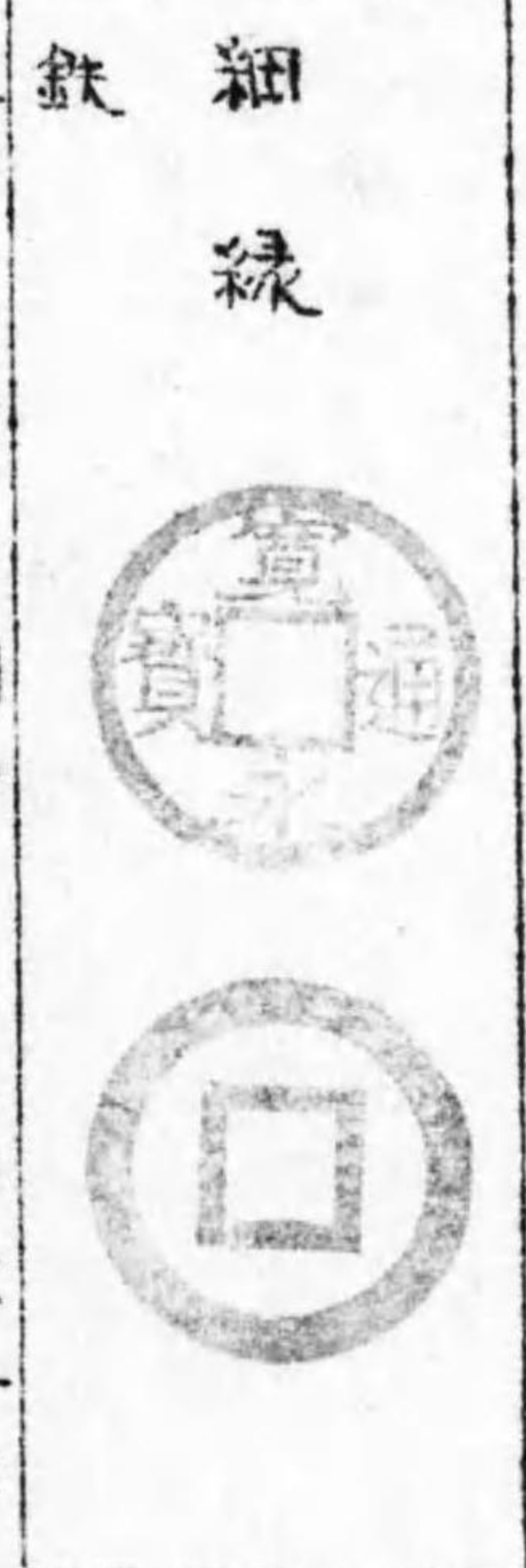
寛戸座 第六期 鑄期自明和二年九月至安永三年五月

湖縁

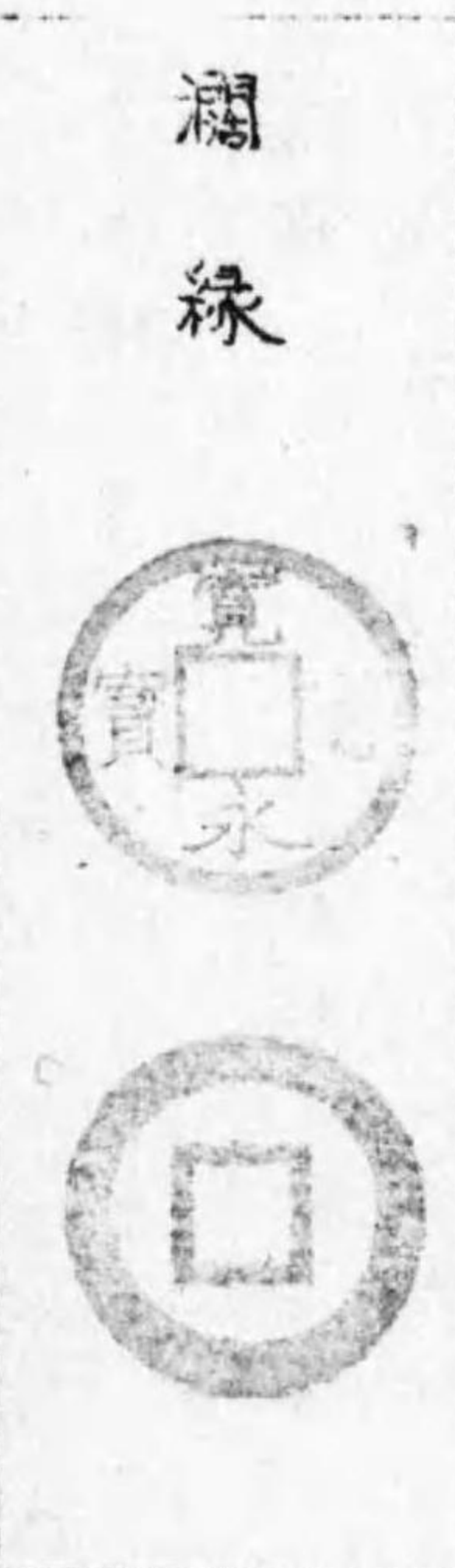


中縁





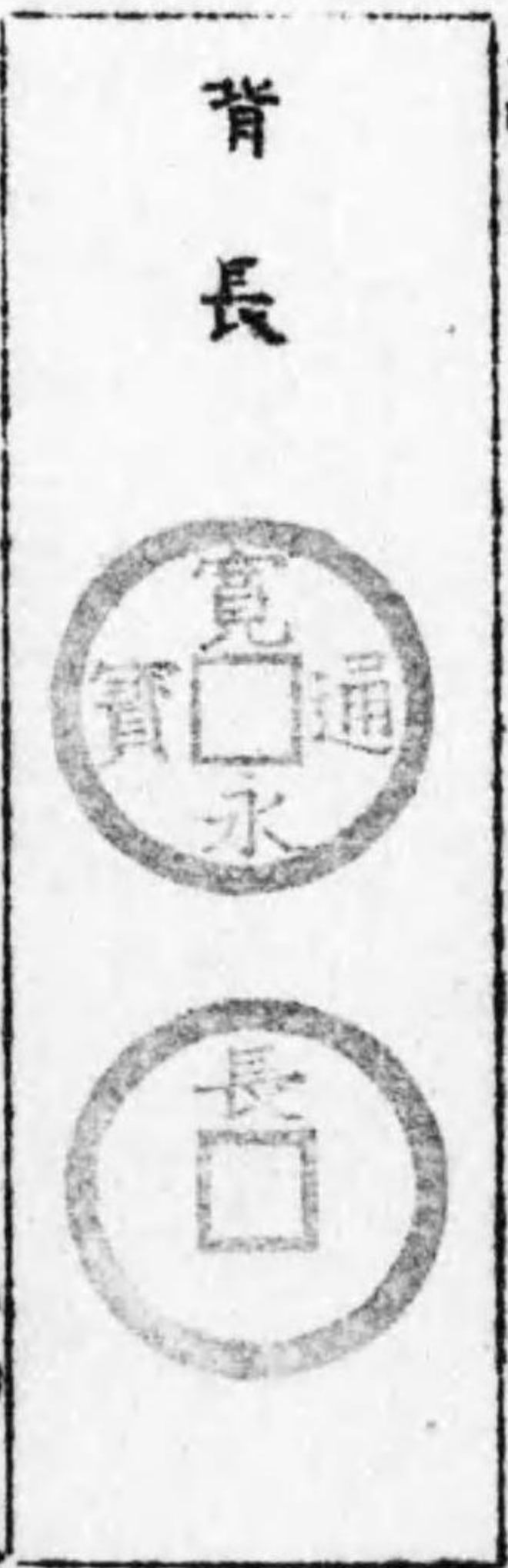
藤譜 鐵錢、明和二年至四年冬江戸亀戸所鑄、徑八分半、重一匁、小者徑八分弱。
 拙譜 (上略) 徑八分弱、凡三種。



藤譜 明和五年江戸亀戸止、鉄錢所鑄、徑八分弱、重七分五厘、有二様。
 芳譜 (上略) 止四年來所鑄、鉄錢後所鑄、凡三種、徑八分弱、重七分五厘、小者徑七分、重不過五分。

拙譜 (上略) 止四年來所鑄、鉄錢後所鑄、銅色白濁、凡三種、(以下芳譜同文)。
 貨幣秘録 明和二年乙酉七月、後藤庄三郎に命ぜられ、亀戸村にて六千四百坪の地所を賜ひ、鑄錢定座を立らぬ、其年九月十五日より、吹方始む、一箇所吹高二万貫文、ついで定座あり、安永三年丙午九月に至り、鑄錢事業を廢せらる、凡十年、此間鉄錢吹高二百廿六万二千五百八十九貫文餘。

長崎座 錫類自明和四年四月至安永二年三月

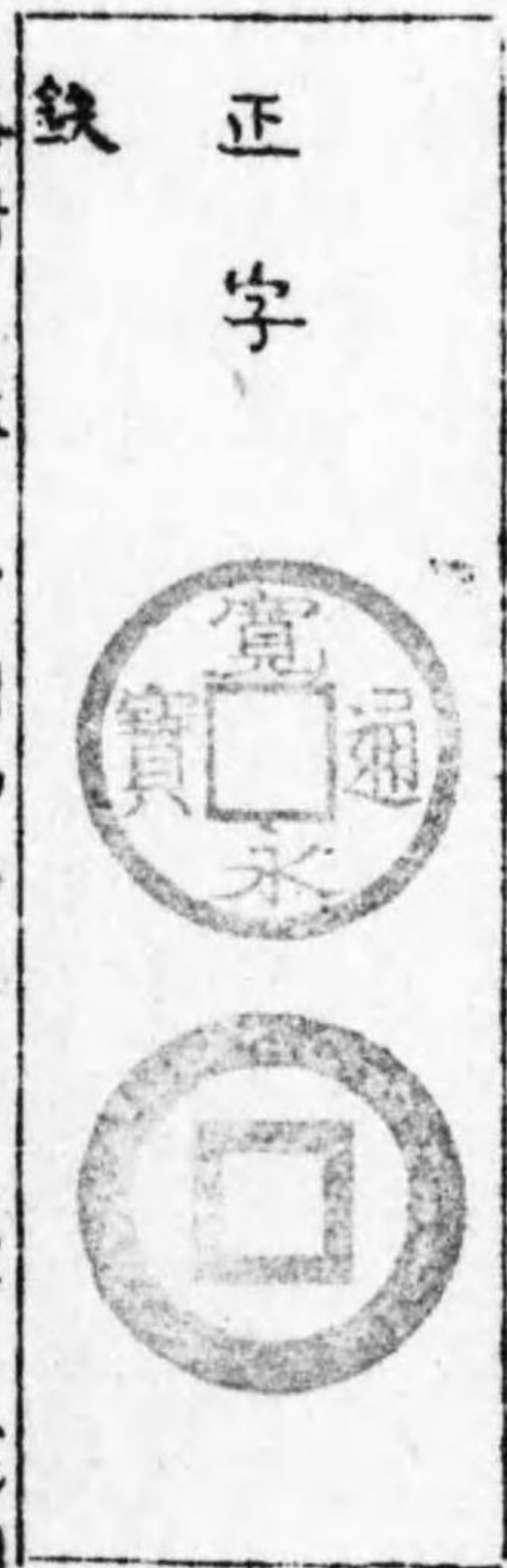


藤譜 長字、明和二年肥前國長崎所鑄、背文長字、在穿上、銅質疎悪、製不精、徑八分弱、重八分。
 拙譜 明和五年肥前國長崎所鑄、凡二種、背文長字(中略)、上一種錫種、而未銅者、徑八分、重一匁、至鈔或云銅母、背文穿上、置拙字未見之。
 中川 拙垣譜に謂ふ錫母、今存せず、間々模鑄銅錢有り、皆座主に非ず、背拙字亦更に見ず。
 続化蝶 面文高尾嘉左衛門書。
 長崎年表 明和四年長崎奉行石谷備後守、新見加賀守、拙住垣硝藏跡に鑄錢所を置く。

長崎市中明細帳 鑄座の總坪數四百十三坪四合八勺。明和四年丁亥四月朔日許可を得始めて鑄座に着手し、安永二年迄七ヶ年の間銅を二十三万一千貫文を吹立。江府より仰出され後藤惣左衛門、福田十郎右衛門、年寄町年寄に御書附を以て被仰渡候。出来支の義一貫文に廿十五匁替の積りを以て會所に請負せ可申候。初年は普請入用等の臨時も有之、付金六百兩、二ヶ年目より千兩宛の積りに以未致し、唐紅毛持渡相用云々、亥六月。種々の義赤銅にて採之、表文寛永通宝、裏文長字、差渡八分輪、厚十七匁、外形内詰、載分方、量目九分、唐通事目所高尾嘉左衛門書之、糸係、後見習内田、跡四郎彫刻、右種を以て錫を以て右錫を以て通用支の種を鑄置申候。錫種は錫八分、鉛二分、通用種を以て銅六歩、錫二分、鉛一步、重白目五匁、又銅六歩、鉛三歩、錫一分、但し通用種々の金合を以て湯種並九鏡を相採申候。

貨幣六二 支座跡、長崎市橋佐町三丁目より旭町四丁目にて、同町七十二番地に井戸今に存す。

伏見座 第二期 鑄期自明和四年九月至安永三年九月



藤譜 錢支、明和四年至六年山城国伏見所鑄、徑八分半、重一匁。

稻譜 (上略) 伏見西濱所鑄。明和四年丁亥九月初て賣出す。泉貨鑑 明和四年九月四日、城州伏見西濱に於てこれを鑄、宇野宗明云此より後に此の錢支皆支質至て悪し、支に茶碗の飲を入るゝことは宝永の九支の時より興れり、土を交て鑄ことは此伏見支よりはじまれり。

鑄額 鑄額百四十二万二千七百八十貫文。





久慈木崎座 第一期 鑄期自明和五年秋至安永元年十月



藤譜 久字錢支、明和六年至八年常陸国久慈郡太田郷木崎所鑄、徑八分、重九分、背文久字在穿上、又有久二二字分在穿上下者、明和九年以後所鑄。泉志 寛齋筆記、久慈郡太田鑄座は明和五年秋より鑄始。所太田木崎下田町通。明和八年四月二日焼失。焼失後御普譜成就郷手座となり、同年秋吹始、九一年にて安永元辰十月より鑄支休に成。頼主小沢九郎兵衛、采田東口、惣取、綿久、米村、堀江、權兵衛、惣奉行太田郷宰佐々木政右衛門、金主、関岡五郎、兵衛、外四人。其後九郎兵衛へ被付、同二年六月、同人、事江戸へ罷登り、廿四日土出、類相濟、午四月下旬吹始。安永六年七月晦日限り相濟。筆者は野口多新

次なりと。

仙臺座 第四期 自明和五年十二月至安永元年十月

大字		
小字		

藤譜 十字鉄貨、明和七年陸奥国仙臺石巻所鑄背文十字在穿上、徑八分、重八分。
 芳譜 又有無背文見下。
 泉志 明和五年十二月より、安永元年十月に至るの間鑄多。
 永野家録 江戸定座差配三浦屋惣右衛門鑄額三十九万千六百六十六貫六百六十六文。

佐渡座 第四期 自明和八年二月至天明元年二月

背佐		
無背文		

藤譜 佐字多、安永口年佐渡国相川所鑄幕文佐字在穿上、徑八分、重八分、銅質廉悪、製作不精。
 芳譜 (上略) 一種有魚背文者。
 猶譜 安永年中(略)小者徑六分五厘、銅質疎悪、製作不精、又無幕文者二種、徑七分五厘、小者七分。
 佐渡志 明和七年銅貨を鑄ること左許され、八年二月より鑄始め運上をさし、請負人は清八、安四郎、佐左衛門、忠兵衛、善兵衛なり、天明元年二月までに鑄る所僅かに五万八千貫文餘にして止みぬ。

久慈木崎座 第二期 自安永三年四月至同六年七月

濶永		
狹永		

藤譜 第一期と共に説く。
 貨幣二九 安永三年より同六年七月に至るの間鑄多。
 同三。 久慈座は木崎二丁目より今停車場構内となれり。鉄貨凡六十九万五百貫文を鑄る。も文筆者東江源繼。
 鑄貨 第一期と合算額二百八万五百六十九貫文を鑄。

仙臺座 第五期 鑄期自天明四年六月至同七年

背文 刮去



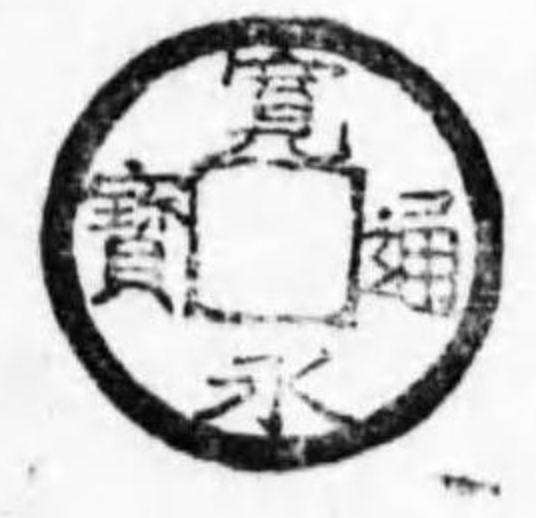
藤譜 天明四年六月陸奥国石巻所鑄其様刮去十字其幕文用之徑重同十字
鑄貨 天明四年より同七年まで三十万九千三百三十貫文を鑄了。

葛巻座 第一期 鑄期文政天保間

闊縁 鉄



細縁 鉄



大全 南部支文政天保之間所出陸中国九戸郡葛巻村鷹巣塚彦八郎鑄之云。

深川座

鑄期自天保六年十一月至同七年十二月

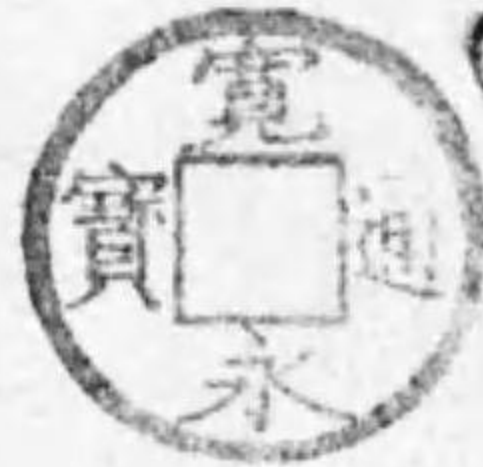
省寛 鉄



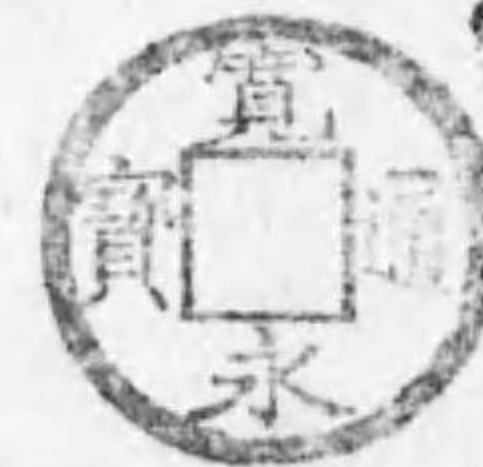
泉志 雜件録 天保六年十一月至同八年八月元元右衛門町本座。
貨幣和録 天保六年己未九月金座にて鉄を鑄る同七年申迄吹高五万五千二百六十貫文餘。

仙臺座 第六期 自天保九年至同十二年

細背 鉄



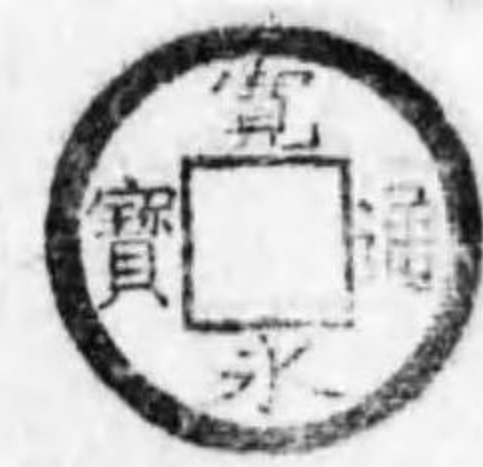
同背 鉄



闊背 鉄



同背 鉄

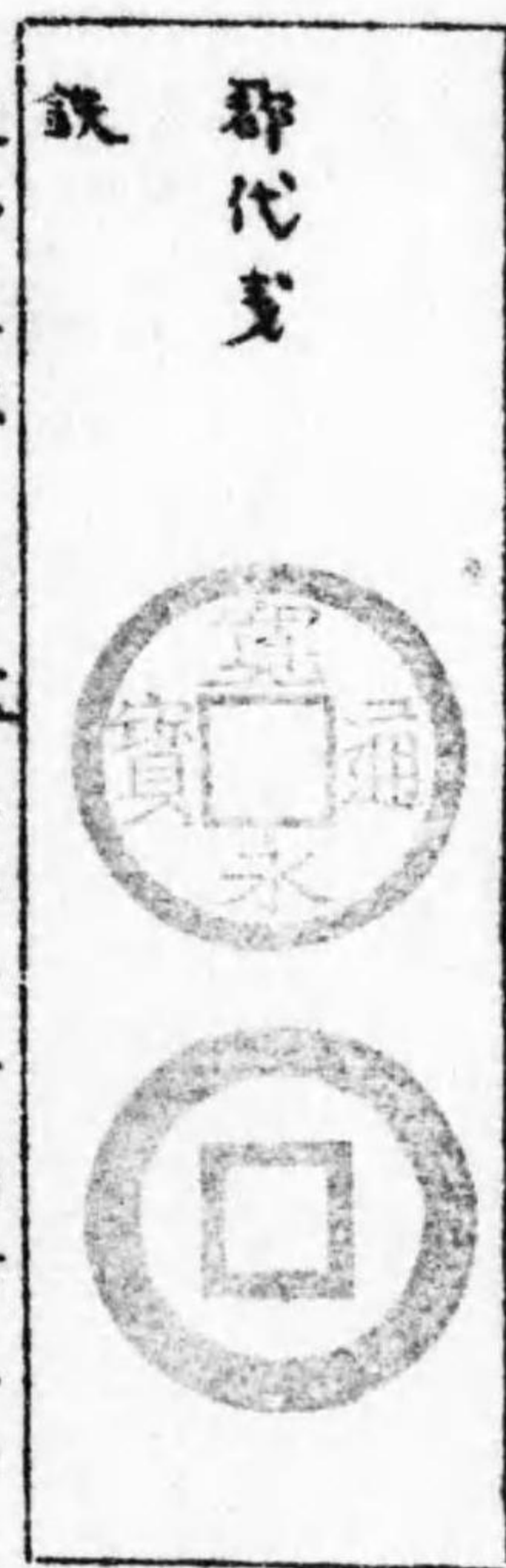


永野家録 銅は御許しに成らず鉄を天保九年より同十二年迄十八万六千

四百五十八貫三百文を鑄造引受人菊池三九郎。

小菅座

鑄期自安政六年自十一月至慶應三年四月



永野家録 安政六年十一月廿三日より新鉄錢通用被仰出。定座面積一町五反三畝十步、建坪千七百八十坪、井戸九箇所、普請費用二千八百二十餘兩。鑄額百十六万四千五百六貫五百文、權錢十七万四千六百六十七枚。慶應三年五月廢場。

遊仙堂 年代自安政六年十月至慶應三年四月、鑄地南綾瀬村大字小菅(旧小菅御殿跡代官所)今監數敷地内。引請江戸金座。

葛巻座 第二期 鑄期自万延頃至明治二年七月



私考 明治二年七月十日官制改革により廢場。

仙臺座 第七期 鑄期自文久元年正月至明治元年三月



永野家録 万延元年申年勘定役高瀬清三郎仙臺鑄錢取締として差遣さる。文久元年酉十月九日永野政之助出役。私考 永野家の記録にあり表記した鑄時と認む。

阿仁座

鑄期文久二年

大様



小様



私考 秋田藩と同時に鑄造したのである。

佐渡座 第五期 自文久二年三月至慶應三年四月

背佐



貨幣六六 文久二年より開炉せし地なり、座跡一丁四方のものなるべし、今に四面の石垣を存せり、其半は崩れたる處よりかけて鉄滓夥しく散乱しあり。貨幣七五 文久二年三月より本吹。私考 座人井上大藏外二人。寛永をば慶應三年打切り、文久を古鑄る。

赤村座 鑄期慶應元年

正字



貨幣四七 山口縣美祢郡赤村字多屋敷。右圖及同様也。

水戸座 第五期 鑄期自慶應元年至明治二年十一月

廣穿



小様



貨幣三七 鉄の小字は文久元年水戸本國漢の芝座より出たるもの。私考 那珂港の芝座は慶應元年の開場と思考する。

當四錢

大全

阿仁銅山内加護山にて鑄。此したのである。

大様



小様



佐渡座 第五期

自文久二年三月至慶應三年四月

背佐



鉄

貨幣六六 文久二年より開炉せし地なり。座跡一丁四方のものなるべし。今に四面の石垣を存せり。其半は崩れたる處よりかけて鉄滓夥しく散乱しあり。貨幣七五 文久二年三月より本吹。私考 座人井上大藏外二人。寛永をば慶應三年打切り、文久を古鑄る。

赤村座

鑄期慶應元年

正字



鉄

貨幣四七 山口縣美祿郡赤村字多屋敷。此圖及同枝也。

水戸座 第五期

鑄期自慶應元年至明治二年十一月

廣穿



鉄








小様



鉄

貨幣三七 鉄の小字は文久元年水戸本國藩の坐座より出たるもの。私考 那珂港の坐座は慶應元年の開場と思考する。

當四錢

<p>肥字</p> 	<p>道勁</p> 	<p>倚永</p> 	<p>隔輪</p> 
<p>瘦字</p> 	<p>正字</p> 	<p>縮字</p> 	

藤譜 四当假論、明和五年江戸幕府所鑄六月十一日初元此等二様一徑九分強重一匁四分一徑九分半重一匁四分幕末平地有水流紋。

芳譜 (上略) 此等二様而各二種一様有徑一寸強者疑東官様也。

統化 明和戊子五月晦日御持之波文少者明和六年秋より鑄る。

鑄貨 鑄額五百六十三百六十八百八十貫二百一文。

中川 波紋多きもの二様あり、肥字を俗深種と稱し更に初鑄に屬すと云ふ。

貨幣三 青銅は明和五年に初めて背に二十一波文を置きたるもの、小異約四種を鑄造したるに起り、江戸中野新田の銀座支配の本妙に鑄せられ、數个月後の翌明和六年には改めて背の波文を十一とし、旧式の銅母形種より産出する方法を、新案の真鍮母を改めたる硬質の彫母に依りて優に精美なる普通母をだし、更に發行せし二十一波文の隆起せる字文不鮮明の故を補ひて、完美なる背十一波の四当を發行し、盛んに鑄出せしものなり。

泉志 明和六年より天明八年十二月まで継続す。

遊仙堂 銀座下吹所は旧換千田新田にして現今の東京市深川區千田町なりとす、当四角餘を此所にて鑄造。

小波



瀾字



接郭



略譜 秋田鑄造(瀾字)同上鉄永接郭。

橋場座

第一期

鑄期自文政四年十一月至同八年十一月

赤



隔輪



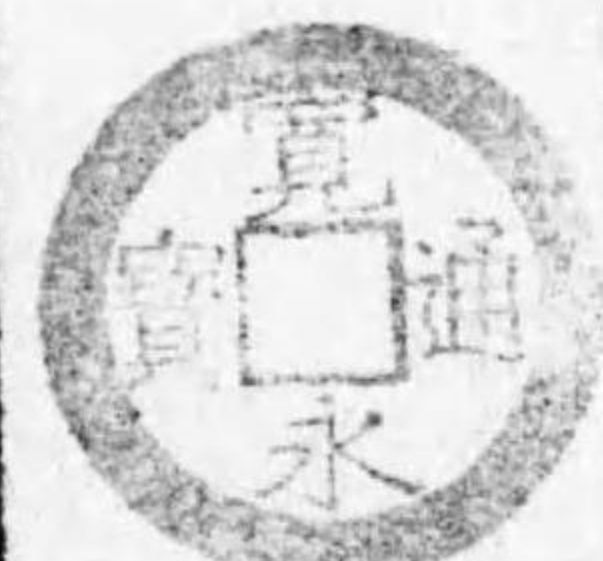
泉志 文政四年十一月より同八年に至るの間江戸浅草橋場に於て鑄る所のものと存す。面文は明和太波多に同じ、されど製作不精にして帯赤黄色なり。貨幣松録 文政四年十一月より同八年まで五年間銀座にて真鍮を吹増。

橋場座

第二期

鑄期自安政六年至明治元年三月

文久様



泉志 浅草橋場にて鑄る銅貨文久様に美して暗黒色を呈す。年表 自安政六年至慶應。

深川座

鑄期自安政六年十一月至慶應三年四月

精銀大様



貨幣七三 萬延元年。鑄期自文久元年正月至明治元年三月。

鉄 小様



仙臺座

第七期

鑄期自文久元年正月至明治元年三月



名鑑 万延年間。
私考 同期並其の条参照。

水戸座 第四期 鑄期自文久元年五月至元治元年十二月



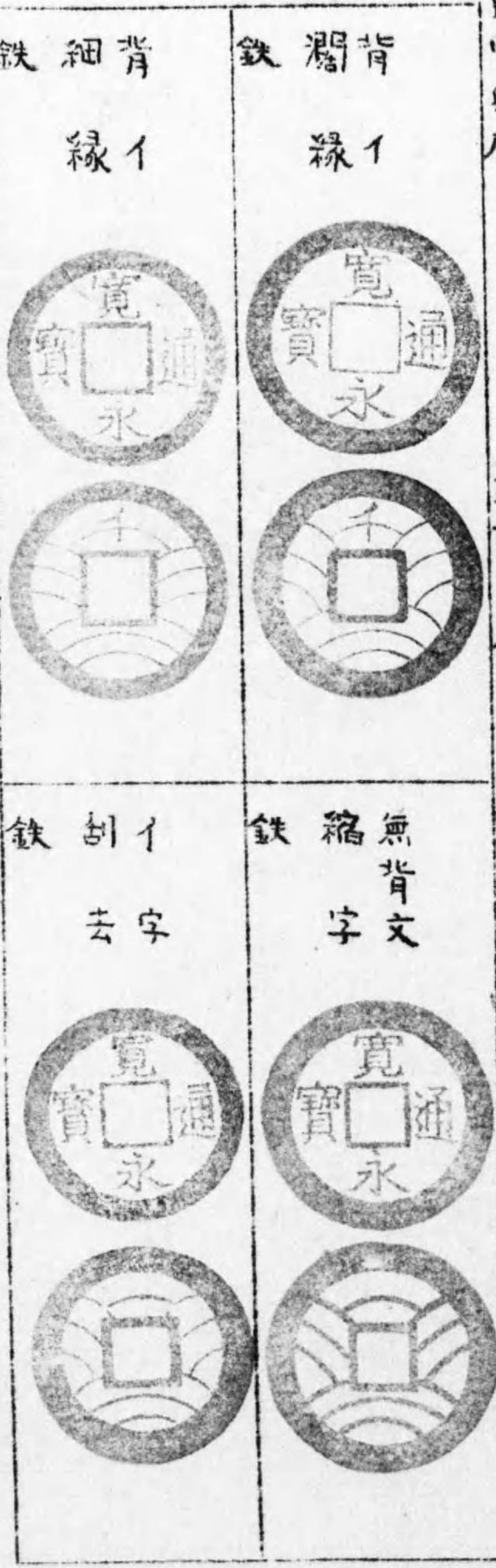
貨幣三七 祝町字辰ノ口多座は、水戸御土川崎縫殿之助(八右衛門)の計畫せるもの時は文久元年なり辰ノ口座は当四寛永多なり。
私考 祝町は今の東茨城郡磯濱町の内。

安藝座 鑄期慶應元年



貨幣二六 慶應年間安藝國鑄。

藤堂卯座 鑄期自慶應元年至明治元年十二月



名鑑及年表 慶應二年伊勢國所鑄。
貨幣五八 慶應年間津藩鑄。

會津別邸座

鑄期自慶應元年 至明治元年十二月

鐵 肥背
字ノ



鐵 瘦同
字上



鐵 小
様



名鑑 慶應二年。
貨幣七三 慶應二年會津藩の江戸深川西町の下屋敷に於て鑄。

水戸座 第五期 鑄期自慶應元年 至明治二年十一月

鐵 瘦背
字ト



鐵 無背
文



貨幣三七 細谷村の遺跡は字を新渡船といひ往時神勢館と名づけし水藩

の武器製作所の在りし所なり、其座の跡は同村三十畝地福田三由の持畑を始
め其四辺一丁四方許りの地にて当四畝を鑄る。
私考 この所は今の上大野村大字細谷。

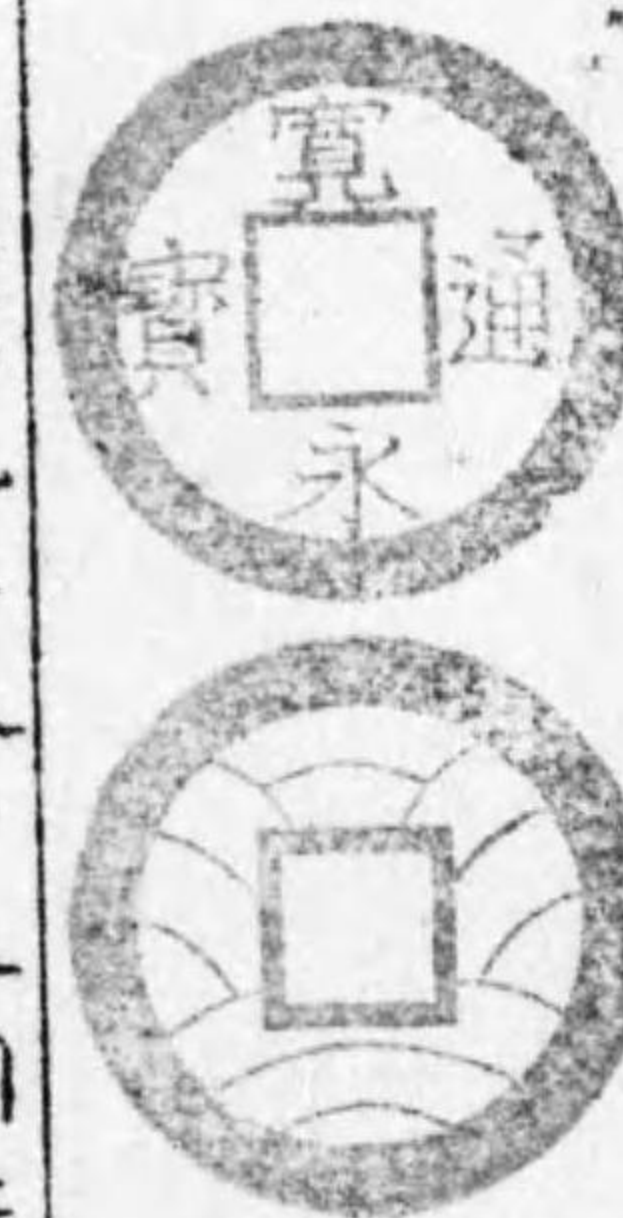
鐵 狹
字



鐵 廣
字穿



鐵 廣
穿



貨幣三七 慶應元年水戸本国にて鑄。
私考 其座所在地は淺町。

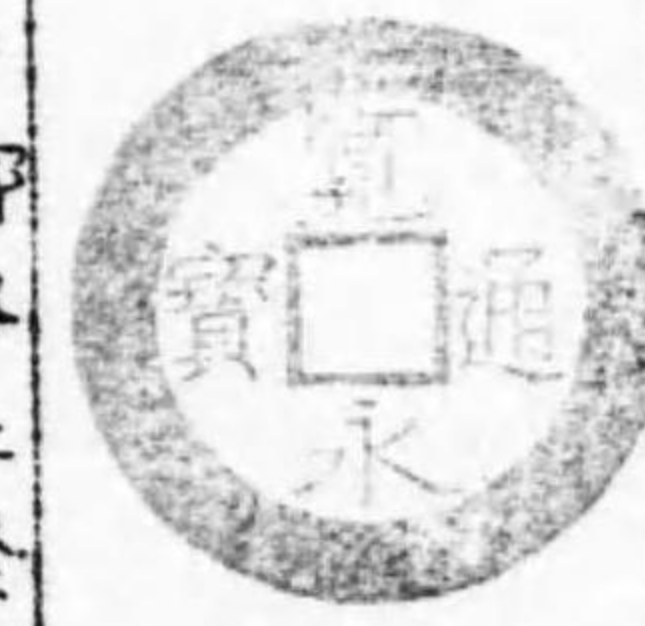
水戸邸座

鑄期自慶應元年 至明治元年十二月

逆肥 字ト



短宝



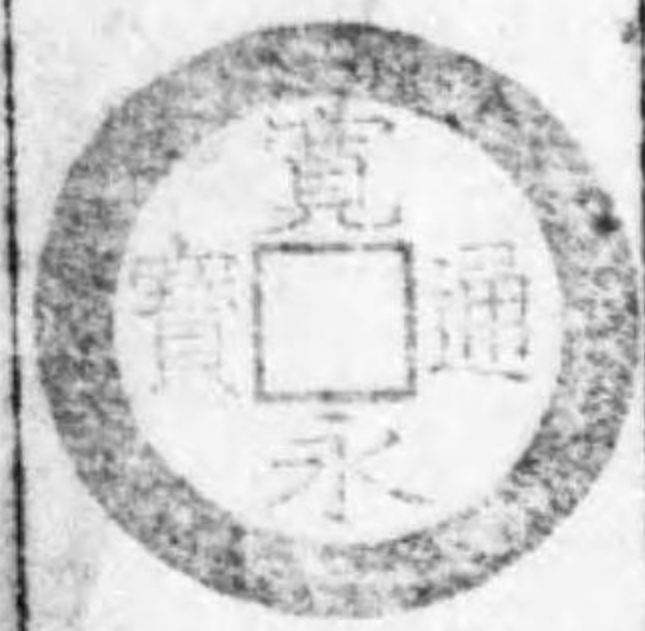
貨幣三四 短宝は慶應年中江戸本所小梅の江戸邸内に於て鑄造。同三三七 小梅町種方坂上大助の證言。自合は浅草橋場真崎の天保及小梅水戸屋敷にて鉄四文を鑄造す鑄造受負者増田某なり。小菅定座棟梁田水戸屋敷の證言。多座に於ての履歴は小菅座に初まり橋場真崎を経て常陸祝中岩市の證言。多座に於ての履歴は小菅座に初まり橋場真崎を経て常陸祝可辰ノ口座に赴き更に小梅水戸邸座より深川會津邸座同藤堂邸座に至り再び水戸邸座に戻りたり。戸階辰ノ口座は江戸より種多職工を招きたり時作文久元年の事と覚えたり。辰ノ口も座の事は四寛永鉄を以て自合は其種多及砂型を磨くに用うる鏡を鑄造し五月上旬出張し七月上旬に於たり。小梅水戸藩邸座は同邸内に大砲の鑄造所あり其証に開座したるものにて其位置は同邸或は隅なり此座は水戸藩に於て幕府の許可を得開きたるものなり。小梅座の開始は浅草に出火ありて雷神門の焼失したる日より十日程前なりしと記臆せり。小梅座は前後三回の改鑄あり第一回は日本橋釘店前伊勢平と云ふ釘商請員第二回は芝の釜屋権右衛門と云ふ金物商請員第三回は同釜屋と川崎八右衛門とにて一時邸内に二ヶ所の釜屋あり第四回は

は又釜屋なりしも大に鑄造せしめて止みたり。第一回は当四寛永鉄を以て背波文にトの字を加へ第二回は当四鉄を以てして此時は背文を加へしや否やを記臆せし。第三回は当百文天保銅を以て糊著せしめ錫種を作つて文字を背波紋に自分か加へたるト字は松葉を以て糊著せしめ錫種を作つて文字を正したり。多座に於て特に職工へ日當を給するに計算上の便宜より時々小鉄を鑄たり其中には背にト字を据へたるものあり。江戸各座の廢止は明治元年なり。川崎八右衛門が小梅座にて鑄出したるものは小石川の江戸小梅屋敷にて仕上げせり。かく坂上大助由中岩市が聘せられしといふ江戸小梅の内実は最利益多き当百文を鑄たりし際東は鐵の当四文が表面の額ひなれども百文の鑄造により利益を計り居りし際東は鐵の小文は最利益少きためホシノ申訳的より鑄造せず、当百文のみに重きを措きたるもの如し。

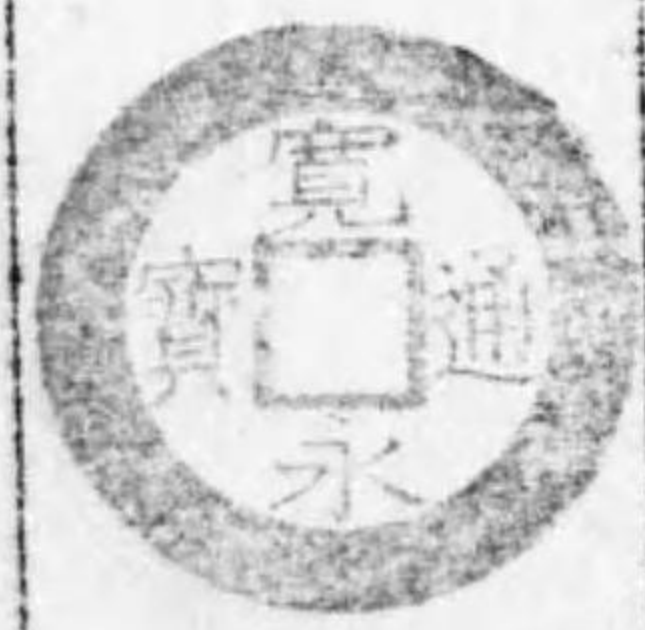
盛岡大迫座

鑄期自慶應二年五月至明治二年六月

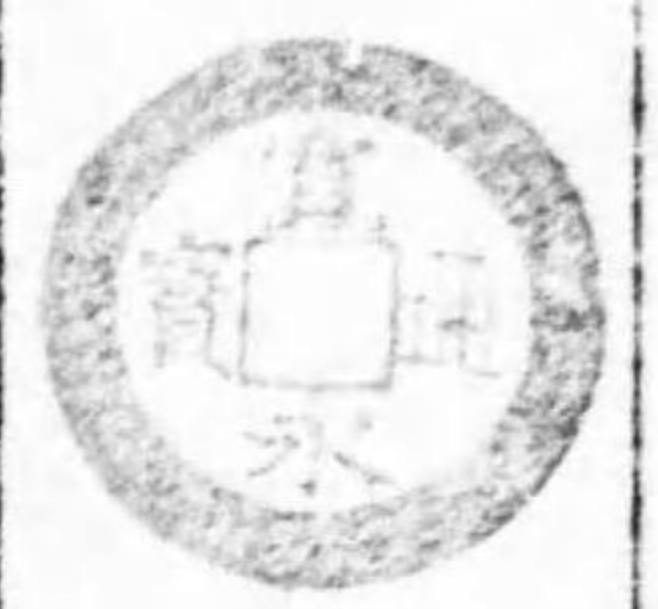
背盛



肥字



背盛
鉄 郭



同 上
鉄 無背文



貨幣五 所小田源六が盛岡藩の命を承けて本座開設に關しこれに幹施を
 左に付ては盛岡御勝手御用達の名義を以て幕府の当路に取入り種々奔
 走の末終に本座開設の許可を得ることとなりしかば幕府に請ひて當四文母
 金を始め鑄製器械一切の見本を借り下げ長持二棹に荷捲へ以て盛岡に向け
 發送せり盛岡日誌に 慶應元年十一月十一日領内に於て岩鑛銀を以て大小
 銀取交鑄立願之通仰付らぬ度旨尤も四文文一箇年拾万貫文づゝ十箇年吹立
 願上たゞに翌二年四月三日四文文一箇年十萬貫文づゝ五箇年吹立通用の儀
 去十二月廿八日願之通差許されたり。外川目と云ふは小村にして大迫を去
 る東南二里餘を座は字小鞍掛と稱する所なり此地八木巻川東岸に沿ひ上開
 伊郡連會村に至る。
 貨幣七 本座に於て鑄出したる鉄貨は大迫町宮部及び盛岡紺屋町細川甚
 助の両所に運搬し臺摺磨をかけ而して通用せに供したり。明治元年四月一
 日より受員となし外川又藏經營す。
 貨幣一〇 明治二年六月廿一日焼失廢場。

盛岡栗林座

鑄期自慶應三年八月至明治二年十一月

背山
鉄 瘦字




同 上
鉄 無背文




貨幣八 慶應三年五月大迫座の分座として開設許可鑄製著手は同年八月
 十三日なり本座は外川目より規模大にして仕上場等まで設備せり。經
 堂者外川又藏。母本郎刻盛岡藩御彫物師盛岡八日町住月館八百八本町住縮
 田太郎吉。明治二年未人頭及び有品調。同年十二月江刺縣廳に書出。寛
 男百五十四人。女四十六人。子供八人。馬力五十人。炭焼三百五十人。金
 六百四十人。金六十兩三万七千六百貫文(六貫八百文にて一兩)金一万七千
 七十一兩。諸建物道具等代以上。当時栗林一村の人口を考げて僅かに六百十
 三人に過ぎざりしもの在本座の使用人はすべて六百四人にて其十中の七
 八は皆他地方より入來れるものなれば其材の賑はへること亦以て懸察する
 に難からず。
 私考 本座は明治二年十一月官制改革の爲廢止。

御用錢

寬永十三年
江戸座
大字




同 上
接 郭



數種。指譜。寬永年間所鑄俗所謂御用者大者徑一寸重一匁四分小者九分弱有

寬永十三年
坂本座
挑永



大全 坂本御用者。

正德四年
龜戸座
狹穿



指譜 正德年間所鑄徑九分三厘重一匁四分五厘。

享保十七年
難波座
濁緑




同 上
厚 肉



指譜 享保年間振津難波村所鑄有銅者有錫者製作並不一樣大者徑九分七厘重二匁小者徑八分七厘重一匁二分。

元文元年
伏見座
細郭





指譜 龜戸者と共に説く。

元文二年
猿江座
廣郭





指譜 元文年間所鑄徑八分五厘重一匁。

元文四年
平野座
大野字

同 上
大字廣穿



元文五年
和歌山座
背一






同 上
平永




元文五年
小名木川座
背川






同 上






藤譜 川字也、元文二年小那岐川所鑄、銅色淡黃徑八分、重九分、幕文川字在穿上、按此疑稟官樣也。
猶譜 (上略)疑稟官樣也、未見其子。

寛保年中
高津座
貞餘

同 上
元六

藤譜 元字假鑄也、寛保初京師商人請鑄之、一文當時行也、五文以通用天下、様也、徑八分、重八分、文曰寛永通寶、幕文元字在穿上、其様同寛保高津所鑄元字也。
寛保高津真鑄也、和漢泉貨には稟官の事とし、寛永藤譜には普通の種とす、未だ何れか是なるを知らず、此書體二様あり、本編には大字なる者を撰み備考品中に載す。
真鑄は、一文を三文の通用類不叶ざる品にて往々存在せり。
同篆書は、銅質真鑄に似たり、今彫種を一品子書二品を觀る、旧譜載せざる所と雖も、製作端正にして未だと同視す可き者に非ざれば、姑く備考品中に掲ぐ。
又大様深黄の篆書に、背穿上元左右六変奇品云々。
貨幣七一 貞餘質の打製也、面背を別々に作り、更に合せしは仕上げたるものにて、文字の篆法頗る奇拔美を普通の寛永と異なるとは出来ぬ、唯背穿上の元字だけは楷書であるが、これとても寛保の元字書のそれとは同一と見ることとは不可能で云々。

安永六年
久慈米崎座
種 彌 敷



貨幣二九 寛永更書彫母素銅也。是は水戸老の記事中にありたる、明和木崎背久の彫母と、一つの包紙中に「夫婦」と書かれて、小沢家に保存されしものにして織字大欄縁の更書なり。更文餘りに織細に彫り浸いられたるが爲め、終いに未使用として、目的を達し得ざりし類に属すされど砂范に沾用されたる跡を存するにより、他日子老の出現あることを期待す。

天明元年
佐渡座
種 背 佐



名鑑 帶黄紅褐の母老のみにして(略)存在希少なり。

文久三年
仙臺座
試 当四無波文



同上
試 無背文



身譜 無波文は銅色赤褐当四老の波文を削りて種老とし鑄たる者に似たり故に此名稱を附す、製作精好にして座老たる疑ひなし、或は御用老の類なりんか。
身譜 無波文当四老は製作精煉銅色赤褐にして、元当四老の波文を削りし字を嵌入して種老とし鑄たる者(略)疑らくは此老も亦通用老に非ざるべし。

慶應元年
水戸座
種 廣 穿



慶應元年
水戸座
種 狭 穿



名鑑 ト背寛永誦褐至精の母老。
略譜 弘化元年鑄。

備考品

二水
三永



二水
不二水



鑑譜 寛永十三年前鑄之未詳其鑄所永字從二从水銅質黄紫徑八分五厘重

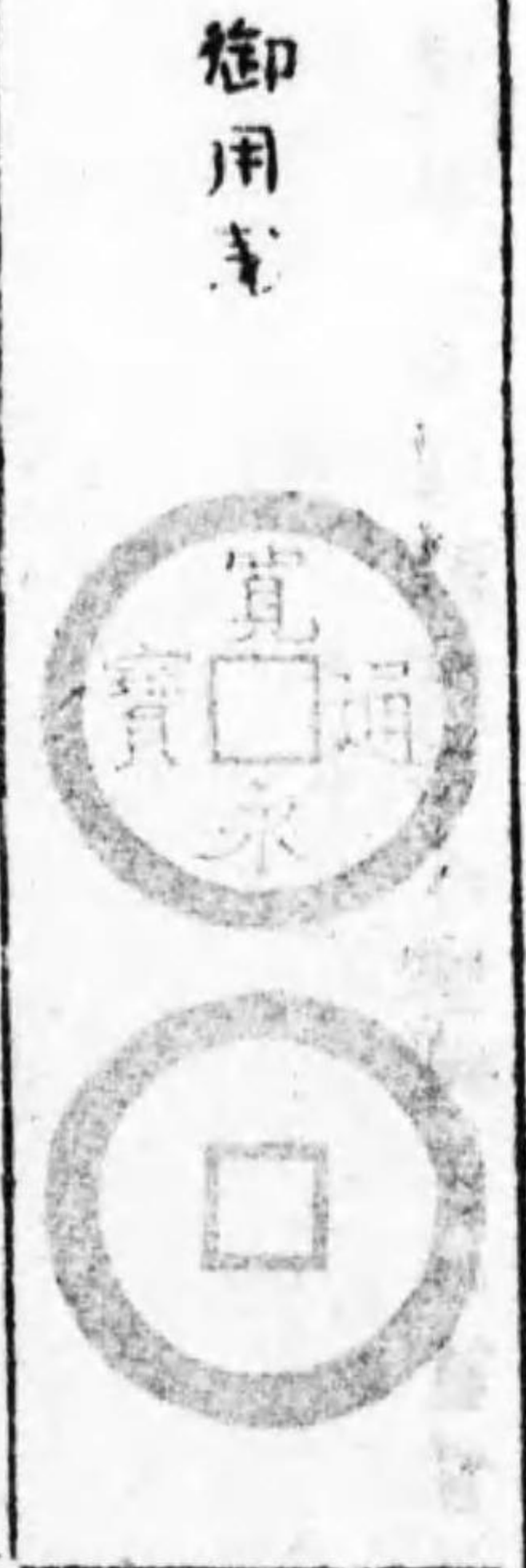
一又、又一種模狀相同唯永字異而已。正一分五厘、重一匁二分、共四点在背字上。中川此は福垣譜の追加に係る然れども其製作共に正しからず、座と見えし。



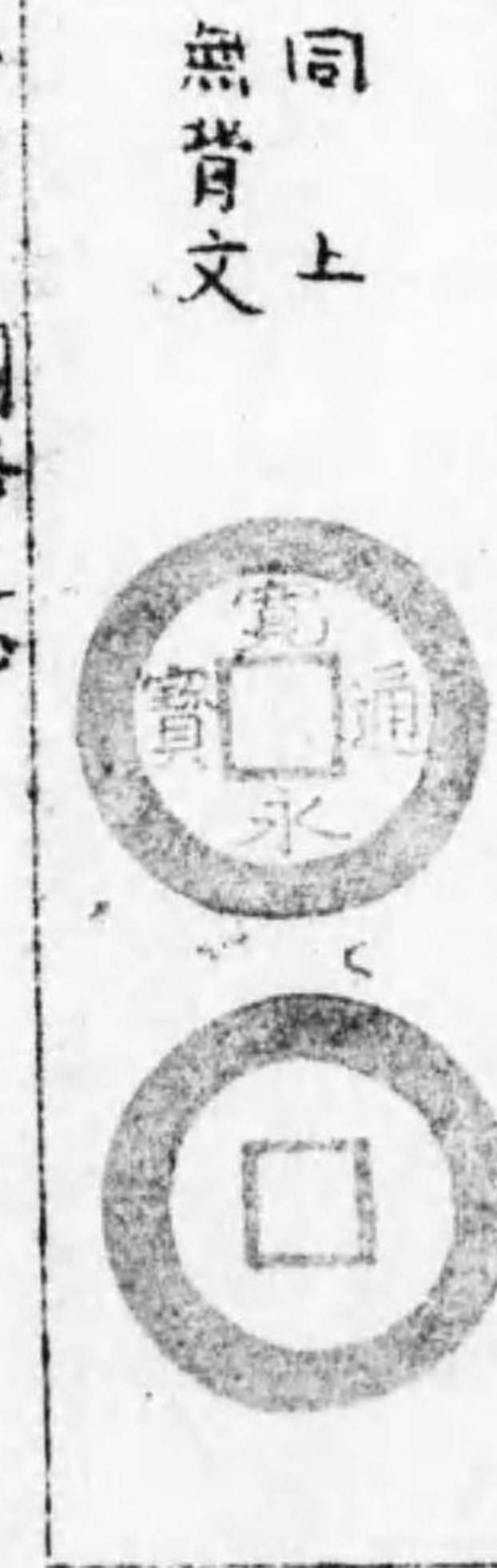
藤譜 (上略) 按一種徑八分五厘、銅色紫褐、製作不精、疑非時行、存俟後考。



芳譜 一種有幕文結體異者。
中川 芳川譜の幕文結體異なりとするもの、座と見えず。



芳譜 年世未詳、徑九分強、重一匁三分、此は彫母也、未見其子、享和壬子年、私考 現今の大家は座と非すと云はる、が或は日光座の鑄ではあるまいか。



福譜 (上略) 一種有無幕者、其他有大同小異者、圖略之。
中川 福垣の無背文なるもの、未だ座と見えず。



福譜 (上略) 背文長字、命題上一種錫様、而未见銅者、径八分強、重一匁五分。

或云有白銅母者青文字穿上置柏字者未見之。
中川 伯譜に謂ふ錫母者今存せず問々摸鑄銅者有り皆座主に非ず青柏字
亦更に見す。

私鑄

○寛永末年私鑄

傳曰寛永末年有私鑄者疑此等之者矣徑七分強重不過四分銅貨淡
或紫褐製作不成體。

○坂本寶

傳曰寛永十三年近江國坂本所鑄者其樣所私鑄者俗曰坂本寶也今
銅質黑濁製作亦惡者疑是矣徑七分半重不過四分。

○長門私鑄

美祿郡赤村の内にて今に守屋と申慮有之由にて其地の人よ
り知らせ來り候其箇所は當時勤場として彼所のありと所なりと今も金澤多く
出候由又此近傍より鑄造用の金屬を出したるが爲なりと。

○前部私鑄

陸中国九戸郡輕米村の内坊里山田岩崎車門同郡小輕米村
鑄造座遺跡考 陸中国九戸郡輕米村の内坊里山田岩崎車門同郡小輕米村
の内坊里山田岩崎車門同郡小輕米村の内坊里山田岩崎車門同郡小輕米村

○内降个項質

大久保同郡江刺家村同國上野伊郡大橋村同郡橋野村同郡花卷
町同國三戸郡中沢村同國東津輕郡小湊村に私鑄所ありし。

○貨幣一

江刺郡岩屋堂町内に錢鑄町と云ふあり。關伊郡豐間根村荒川左

近寛永

私鑄使用す。九戸關伊の私鑄は各地に送り出し以て米穀織物
雜貨と交換せることは故老の齊しく談れる所なり此等の私鑄は維新前後に
於て大いに其數を増加し隨ひて其鑄も亦極めて多額なりしが如し。和賀
郡沢内にて銅を密鑄せしは秋田藩内仙北と仙臺藩内江刺とに送り出して
日用物品と交換す。

貨幣二

文化十年北ノ本内に隠し座あり。文化十一年湯川山に隠し鑄
座あり至新田の百姓大勢押懸け焼拂ふ五月十五日所り。又鍵沢に大鑄
座有て六月廿二日山伏峠の影岩手郡の百姓四百人許り押寄來り小屋々々に
火を掛け諸道員迄一つも不残打碎き焼炭七八千貫目有て皆焼拂ふ。同年二
月十一日小田島嘉兵衛様御下役となり十月より下前に隠し鑄座立長嶺九兵
衛様與瀬軍兵衛様御代官様に一吹拾五貫文差上り吹く。文化十二年四月
廿三日同座焼拂御代官一束。同年六月廿日湯川村にて隠し鑄座頭丸徒頭
と相見候湯川乙百間子供大木原貝沢に追放御山古人半左衛門御免。これ文
化十年以後の事のみなれどもこれより前已に私鑄の盛んに営まれたること
はこの法令

奥州筋

深山の内にて通用錢隱吹改者有之由相聞不屈之事候。
にて明なり。栗石にて私鑄あり唯銅の小と云ふの分傳はる。

貨幣四

弘化年度より盛岡藩に於ては何分私鑄を嚴重に取締りしかば
米慶應に至り約二十年間は其數を減少したることなるが尚此間に於て
八戸領なる九戸郡輕米村に於ては山田車門坊里等に於て盛人に行はれ初め
私鑄を石巻に取らるしきも屢々發覺し母を沒收せられ後には普通

私鑄

は此の法令

奥州筋

深山の内にて通用錢隱吹改者有之由相聞不屈之事候。
にて明なり。栗石にて私鑄あり唯銅の小と云ふの分傳はる。

貨幣四

弘化年度より盛岡藩に於ては何分私鑄を嚴重に取締りしかば
米慶應に至り約二十年間は其數を減少したることなるが尚此間に於て
八戸領なる九戸郡輕米村に於ては山田車門坊里等に於て盛人に行はれ初め
私鑄を石巻に取らるしきも屢々發覺し母を沒收せられ後には普通

用の銅をとり其外輪と内郭とに鑄を施し以て母をとなしたるものなり
と云ふ當時其隣村小粒米蛇口峰ヶ久保等に私炉ありて盛んに製造し尚
前箇次其他教箇所に於て鑄たる形跡ありと云ふ。
貨幣八二陸奥国二戸郡小鳥谷村隱鑄座、錢幣館主田中氏の所有山林
には小字錢山あり弘化前後の隱札座の跡あり天保仙壹千字の模様但し
外輪を著しく磨し小様とせしもの十二枚同進具室のもの一枚を發見す。
○出羽私鑄
藤譜 明和二年出羽国研工私鑄銅質兼惡製作全拙、徑七分弱、重六分、時行
小者爲母、余所見三種。石歌山座正字廣穿小様。

寛永錢研究牒 終

昭和五年二月十日印刷 同月十五日發行

著作編輯及發行者
發行所印刷印刷所

發行館 今泉忠左衛門

愛知縣南設赤郡千郷村大字杉山廿三番戸

附録

藤原氏の寛永錢譜は一巻にして、不知品雜品を附録とし
巻首に左京藤原貞幹撰と記し、寛政四年春三月改題としそ
ある。

芳川氏の寛永錢譜は上中下三巻に分ち、不知品雜品を附
録とし、巻首に左京藤原貞幹撰、源尚友撰、浪華芳川維堅
記し、序文に芳川氏が此譜を纂したるを述べて、寛政七年の
製である。

箱垣氏の寛永錢譜は、正用品及不知品の部を上中下三巻
に分ち、附録は御用錢の類を納め、皇都箱垣源尚友撰と記し
文政十一年の編である。

古泉夫金の寛永錢の部は、甲集一、三、三、で、明治廿一年に土
佐の今井貞吉氏が編輯出版した。

新撰寛永泉譜は、東京の龜田一恕、中川近禮、榎本文城三氏
の編輯で、前編は明治廿七年、後編は同三十一年に出版せら
れた。

328
91

寛永泉志は、三上春哉復本文城三氏の編述で、二巻は明治三
十年、三巻は三十一年、三巻は三十四年に出版し、四巻乃至七
巻は復本の稿本の素である。

附録
終

終